

祝

辞

進歩と世界の科学技術の
発展に大きく寄与されるよう

祈念してやみません

最後に財団法人本田財団が

今後とも我が国の科学技術の
向上と国際交流の推進にさらに
大きな役割を果たされるとも
一層発展されますよう祈念
いたします

平成三年十一月十五日

日本学術会議

会長 近藤次郎

顕著であり、その成果は世界中
の多くの人々を食糧危機から
守り、また今日自然環境保護
の分野で広く注目を集めておら
れることは、皆様ご承知の通り
でございます。日本学術会議
の会長として、また科学者の一人
として、心よりお祝い申し上げます。
スワミナタン博士におかれまし
ては、今回の受賞を新たな推
進力とされ、世界の科学技術の
発展に大きく寄与されるよう
祈念してやみません。

最後に、財団法人本田財団が

今後とも我が国の科学技術の
向上と国際交流の推進にさらに

で開催しておられる大変ユニーク
な財団とお聞きしております

科学技術の発展がもたらす
弊害の問題 世界の二員として

日本が求められている国際交
流の重要性は まさに今目的
課題であり 今後本田財団に
期待される役割の大きさには

計り知れないものがあります

本日ここに本田賞をお受け
になられましたスワミナタン博士
のご研究は そのご功績が極めて
顕著であり その成果は世界中
の多くの人々を食糧危機から

守り また今日自然環境保護
の分野で広く注目を集めておら

顕彰してこられました。過去の
受賞者を見ましても、その時々
の問題を先取した御卓見には
深く敬意を表するものであり
ます。

近年、日本に於ける財団法人
の活動は社会ニーズからも増々
その重要性を増しております。
が、数多い財団法人の中にあつて
本田財団はこの本田賞の授与
と国際交流を目的とした数々
の国際シンポジウムを世界各地
で開催しておられる大変ユニーク
な財団とお聞きしております。

科学技術の発展がもたらす
弊害の問題、世界の二員として

技研工業の卓越した創業者

故本田宗一郎氏と実弟の本田

弁二郎氏の寄付により一九七七

年に設立されたものと承知して

おりますが、この間一貫して

「従来の効率と利益のみを追求

する技術でなく、人間活動をと

りまく環境全体との調和をはか

つた「真の技術」の普及を提唱し

科学技術の分野で顕著な業績

をあげた個人に国籍を問わず

毎年本田賞を贈呈し、これを

顕彰してこられました。過去の

受賞者を見ましても、その時々

の問題を先取した御卓見には

深く敬意を表するものであり

技術の向上 発展は国民の生活
様式に直接係わるものであり

かつ最も影響の大きい分野で
あります 人類が二十一世紀に

向けて新たな発展を目指して

いくためには 科学技術の発展

がもたらす人間・社会への様々

な問題に留意しつつ 来世紀を

展望した先見性ある創造的な

研究を着実に積み上げていか

なければならぬと考えます

財団法人本田財団は 本田

技研工業の卓越した創業者

故本田宗一郎氏と実弟の本田

弁二郎氏の寄付により 一九七七

年に設立されたものと承知して

工学・技術の面におきましては
今や世界の先進国としての

確固たる地位を築くに至つてお
りますが 今後の我が国は人類

福祉の一層の増進のため創造
性豊かな幅の広い研究の発展

を図るところにより 国際社会
への一層の貢献を果たしてい

なければなりません

これまでの人類の発展は科学

技術の発展に支えられてまい

ましたが 特に生産工学や生産

技術の向上 発展は国民の生活
様式に直接係わるものであり

かつ最も影響の大きい分野で
あります 人類が二十一世紀に

祝 辞

第十二回本田賞授与式が挙行
されるに当たり 日本学術会議
を代表してお祝いの言葉を申し
上げます

近年の我が国の発展は目覚
ましくとくに工業生産のための
工学・技術の面におきましては
今や世界の先進国としての

確固たる地位を築くに至つてお
りますが 今後の我が国は人類

本田賞受賞記念講演

エコテクノロジーと飢えの克服

M. S. スワミナタン博士

飢えは人類が長年、征服できずにきた敵である。第二次大戦後、「大人も子供も夜、空腹をかかえて眠りについたり、人間の身体や頭脳の秘めたる能力が栄養失調のために発揮できなかつたりすることがないように」ということを目標としてきた。最近の例をいくつか挙げてみよう。1974年にローマで開かれた世界食糧会議では、1984年をその目標達成の年と定めた。また、1990年9月にユニセフが採択した世界児童憲章では、2000年までには乳児の死亡率を減らし、すべての子供たちが生産的で健康的な生活を営める状況を作り出すという目標を定めた。

その一方で、もっと広範囲に飢饉が発生する可能性があり、マルサスの人口論に基づく計算では、わが国インドを含めた発展途上国の一部ではそれが現実のものとなるという予想が折りにふれてなされてきた。例えば、ポール・パドックとウィリアム・パドックはその著書『飢餓—1974年』で、1974年にはインドが大規模な飢餓に襲われると予想した。幸いなことに、この予想は当たらなかった。ご承知のように、生産性を高めると同時に、生産者と消費者に目を向けた対策を講じることこそ、国内ならびに地球規模で食糧および栄養を確保するシステムを開発する鍵となる。「栄養の確保」とは、私の定義では、その国のすべての子供と大人にバランスのとれた食事と安心して飲める水を経済的、物理的に保証するということである。

わが国を例にとって、飢餓を永遠に追放するために科学と技術が果たす役割について説明してみたい。食糧農業機構（FAO）の後援を受けた専門家チームが1963年に提出した報告書によると、1970年までに食用穀類の生産は10%伸び、これは人口増加率を下回ると予想している。だが、人口増加率は2%強で、これは現在も変わらない。ところが、食糧生産は1963年から1970年にかけて50%近く増大している。これは予想される飢餓を避けるために、いわゆる「緑の革命」技術が導入されたおかげである。有利な価格により貿易機会が拡大したこととこの技術開発が相まって、過去の実績から推定して立てた予想はずれたのである。

インドにおける米、小麦といった穀類の平均収量は1ヘクタール当たりおよそ1トンで、この数字はここ何世紀も変わらない。そこで、1950年代の初期に、日本産のジャポニカ種とインド産のインディカ種を交配する米の品質改良計画が始まった。これは肥沃な

土壌から栄養素をよく吸収する性質をもつジャポニカ種の遺伝子をインディカ種に移植することを目的とした計画であった。この計画で、よい品種の米も生まれたが、それ以上にインディカ種の1ヘクタール当たりの収量の増大が広範囲にわたって見られたのである。最初は台湾産(Taichung Native 1)、のちにはフィリピンの国際稲作研究所産(IR-8)の半矮性インディカ種を導入するだけで、インドばかりでなくその他の南アジアや東南アジアの国でも同様の成果が見られた。

小麦の場合は、春蒔き小麦と冬蒔き小麦に日本産の「農林」の矮性化遺伝子に移植することで、1960年代後半にめざましい進歩が見られた。Norman E. Borlaug 博士の指導のもとにメキシコで改良された半矮性春蒔き小麦も、光に対して比較的感度のよい品種であった。米、トウモロコシ、モロコシ、パールミレット(トウジンビエ)、キマメ、綿、その他いくつかの作物の異種交配あるいは雑種強勢による改良品種を商業化したことも、生産性向上に主眼をおいた生産計画に広がりをもたせた。こうした作物の品種改良と農業経営努力が相まって、1970年代と1980年代には数種の作物の平均収量が倍増したのである。

工業先進国では、環境保全を基盤とした高収量をすでに達成しているので、これを維持することが環境に優しい農業の時代の第一目標とされている。これとは対照的にインドでは、増加の一途をたどる人口に対して、環境と折り合った技術によって、食糧、家畜のえさ、燃料の木材、繊維、その他の需要を満たすレベルまで生産性を高めることが農業研究の主目的なのである。職がなく、その結果購買力もないことが、インドの栄養不良の主因である。これから2000年までに農村地帯と都市部でおよそ10億の職を作り出さなければ、バランスのとれた食事を経済的に保証することはできない。

1968年、1ヘクタール当たりの収量の増加によってインドの小麦と米の生産が大幅に伸びることは明らかだったが、私はインド科学会議の農業分科会の座長挨拶で、乱開発技術よりも環境優先の技術によって収量を高めるべきだと説いた。私の考えでは、環境優先の技術によって生物の生産性を高めるとは次のようなことを言う。

i) 土壌の生物学的潜在能力を高め維持するにあたって、それに伴う物理的、化学的、微生物学的、そして侵食性の側面に同時に目を向けて、土壌の活力を維持する。

ii) 地表水と地下水を長続きする形で複合的に利用することなど、水の効率的な利用をはかる。

iii) 総合的な病害虫対策によって、雑草、病原体、害虫を管理する。

i v) 緑肥、豆類を挟んだ輪作、バイオ肥料、有機肥料、必要に応じた化学肥料の散布などによって、エネルギー、特に栄養素の供給を管理する。

v) エネルギー消費を無駄にしない梱包技術やマーケティング技術を促進し、植物や動物の生物資源のあらゆる部分から付加価値のある製品を作り出すことなど、収穫後の管理を行う。

v i) 自然食品や健康食品、植物を利用した殺虫剤や薬品への関心を取り戻す。

v i i) 土地と水を持続的に利用できるシステムを促進すると同時に、多種多様な生物を保護し危機に瀕した生態系を保護するために、耕作や酪農、捕獲漁業や養殖漁業、林業や農林業を含めた多角的な混合農業システムを改めて検討、考案する。

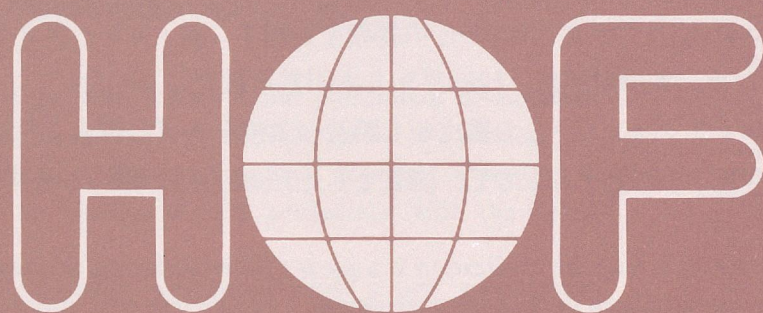
v i i i) 農業部門が大気中の温室効果ガスの蓄積に及ぼす影響を減らし、劣えた土地や不毛の土地の緑化によって、炭素の放出と吸収のバランスの改善を促進する。

こうした「環境保全・緑の革命（エコ・グリーン・リボリューション）」を推進するには、科学や公共政策の面での強力な支援が必要である。科学の分野では、「持続可能な農業のための遺伝子資源センター（Genetic Resources Centres for Sustainable Agriculture）」および組み換えDNA実験によりまったく新しい組み合わせの遺伝子を作り出すことを目的とした「遺伝子開発強化センター（Genetic Enhancement Centres）」の設立が是非とも必要である。こうした素材は各地域に合った作物の開発に利用できる。さらに、環境保全と経済効率と社会的衡平の原則に基づいた農業開発の新しい範例を推進するためには、気温、降雨量、海拔、紫外線放散などの変化に適応できる新しい素材や管理技術を開発する研究所も是非とも欠かせない。マドラスにある「持続可能な農業および農村開発研究センター（Centre for Research on Sustainable Agriculture and Rural Development）」が目指しているのも、この農業および農村開発研究の新しい範例なのである。

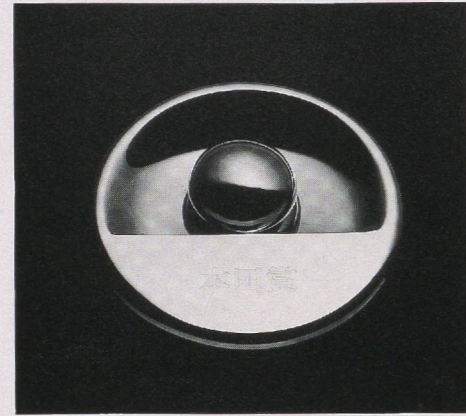
環境保全にはその地域に合った技術が必要である。農民が直接参加した研究ということである。飢餓を征服する闘いにおいて食糧生産の面で現在も今後も満足のいく成果をあげていかなければならないとすれば、公共政策と民間主導の活動や投資はともにこうした「環境保全・緑の革命」の要求に合わせた方針をとるべきである。

HONDA PRIZE

本田賞



1991



本田賞
HONDA PRIZE

人間尊重の文明を創造することは、われわれ全人類にとっての大きな課題です。現代文明がかかえている問題を解決していくためには、従来とはまったく発想の次元を異にした何らかの新しい接近方法を必要としています。

本田財団では、その具体的な方法として、従来の効率と利益のみを追求する技術でなく、人間活動を取りまく環境全体との調和をはかった真の技術——新しい技術概念「エコ・テクノロジー」を提唱しております。

従来の「エコロジー」と「テクノロジー」の調和を目指すこの「エコ・テクノロジー」を確立・普及させるため、本田財団は、1980年から本田賞を設立しました。

本田賞は「エコ・テクノロジー」の観点から顕著な業績をあげた個人またはグループに、国籍を問わず、年間1件贈呈するもので、副賞として1,000万円が贈られます。

The creation of a humane civilization is a great challenge facing all mankind. In order to solve the problems of modern civilization, a completely new approach is required. The HONDA FOUNDATION advocates "eco-technology," a new concept of technology which does not pursue efficiency and profits alone but is geared toward harmony with the environment surrounding human activities.

To establish and diffuse this concept of "eco-technology" which aims at the harmony of "eco-logy" and "technology," the HONDA FOUNDATION established the Honda Prize in 1980.

This prize is awarded annually to an individual or an organization, irrespective of nationality, for a distinguished contribution in the field of "eco-technology." The prize includes a donation of ¥10,000,000.



1991 本田賞受賞者 モンコンブ・S・スワミナタン氏 HONDA PRIZE Dr. Monkombu S. Swaminathan

スワミナタン氏の受賞は、氏が農学および植物遺伝学に於いて数々の研究成果を上げるとともに、世界の食糧問題の解決のために指導的役割を果たし、また自然環境保護の立場からも国際的に活発な実践活動を展開されてきたことによるものです。

Dr. Swaminathan has made many excellent achievements in agricultural and plant genetic studies, in leading role in the combined efforts to resolve the global food crisis, and also has participated actively in the international works in the field of environmental protection.



略歴

- 1925 インド、タミール生れ
- 1947 マドラス大学 農学部卒
- 1952 ケンブリッジ大学 農学部卒
- 1976～ インド国立科学アカデミー名誉会員
- 1979～80 インド農業灌漑省次官
- 1982～88 国際米穀研究所所長
- 1988～ 国際自然保護連合会会長
- 1990～ 国際マングローブ生態系協会会長

その他、1986年にアインシュタイン世界科学賞、1987年には農業のノーベル賞といわれる世界食糧賞を受賞。国際的学術誌にも多数の論文を発表。

Personal History

- 1925 Born in Tamil Nadu, India
- 1947 B.Sc. Agriculture from the Coimbatore Agricultural College, Madras University
- 1952 Ph.D. from the School of Agriculture, University of Cambridge, U.K.
- 1976～ Honorary Fellow of the National Academy of Science, India
- 1979～80 Secretary, Ministry of Agriculture and Irrigation
- 1982～88 Director General, The International Rice Research Institute (IRRI), Philippines
- 1988～ President, the International Union for the Conservation of Nature and Natural Resources
- 1990～ President, International Society for Mangrove Ecosystems

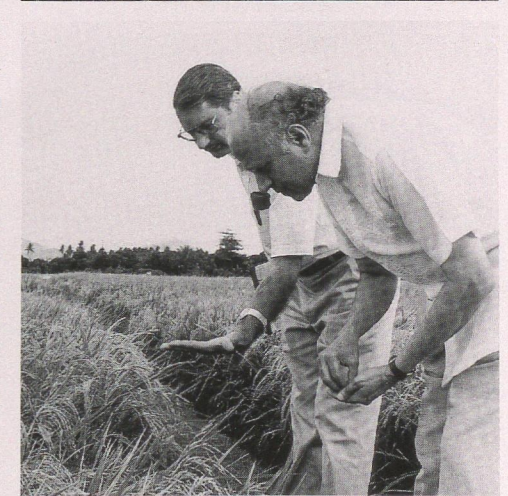
In addition, Dr. Swaminathan has received the Albert Einstein World Science Award in 1986, and the First World Food Prize, which is recognized as the equivalent of a Nobel Prize in the field of food and agriculture in 1987. He also has published over 200 papers in international journals and several books.

受賞者プロフィール Dr. Monkombu S. Swaminathan's Profile



アジアの爆発的な人口増加にもかかわらず、農業技術の進歩はこの地域における食糧危機を最少限に止めてきた。スワミナタン氏は穀物の自然環境への適合(品種改良)を研究する一方、アジアに於ける新しい農業技術の実現にも貢献した。インド亜大陸とその住民を食糧危機から守る「緑の革命」の実際上のリーダーとしてよく知られ、この革命は数年にして、数百万のアジア人を飢餓から解放した。近年は自然環境保護の分野でも国際的に精力的な活動を展開している。

Across Asia, advances in agricultural technology have kept the food crisis problem to a minimum in spite of the population explosion. Dr. Swaminathan has studied adaptation of grain to the natural environment (grain improvement) and contributed to realizing new agricultural technology in Asia. He is also well-known for providing scientific leadership, promoting team work and organizing demonstrations in farmers' fields leading to the "green revolution" which has saved the Indian sub-continent and its residents from a food crisis. This revolution liberated from starvation millions of Asians in a matter of several years. In recent years, he has worked actively and internationally in the field of environmental protection.



スワミナタン博士は国際的な植物研究開発分野の第一人者である。科学者として、またプランナーとして、これまで第三世界に多大の貢献をしてきた。環境に最大限の配慮をしたうえで食糧生産問題を解決する新しい方策を立てる際に、博士の仕事はきわめて大きな影響を与えてきたといえる。

スワミナタン博士にとって、開発と環境保護は切り離して進めてはならない問題である。博士の立場は、この二つの焦眉の課題のいずれか一方に重点を置がちであったこれまでの開発理念を大きく超えるものである。遺伝学と応用植物学の権威として世界に認められている博士は、人類の子孫のために遺伝子の保護がいかに大切かを実感しているため、その研究成果と関連づけて、植物遺伝子という資源の採集と保護を積極的に進めてきた。

博士は、現代のバイオテクノロジーを最大限に活用して、第二の新たな「緑の革命」を推進する目的で近年財団を設立し、今後益々の活躍が期待されている。

Dr. Swaminathan is one of the major figures in the international development community. His contribution to the cause of the Third World as a scientist and as a planner has been profound. His work has been extremely influential in defining new approaches to the problem of food production with the fullest respect for the environment.

For Dr. Swaminathan, development and preservation of the environment must proceed hand in hand. His position represents a major advance over earlier development thinking, which frequently ascribed somewhat unequal priorities to these two imperatives.

A world recognized expert in genetics and applied botany, Dr. Swaminathan linked his research to active championship of the collection and conservation of plant genetic resources, realising the vital importance of protecting the world genoma for future generations.

Dr. Swaminathan has now constituted a Foundation aiming at pushing ahead a second, new Green Revolution, making the best use of modern biotechnologies.

1980

グナー・ハンベリユース(スウェーデン)
スウェーデン王立理工学アカデミー会長
Gunnar Hambraeus
(Chairman, Royal Swedish Academy of Engineering Sciences)

1981

ハロルド・チェスナット(アメリカ)
SWIS財団
Harold Chestnut
(SWIS Foundation, Inc.)

1982

ジョン・F・コールズ(イギリス)
ケンブリッジ大学名誉教授
John F. Coales
(Professor Emeritus, University of Cambridge)

1983

イリヤ・プリゴジン(ベルギー)
ブリュッセル自由大学教授
Ilya Prigogine
(Professor, Free University of Brussels)

1984

ウンベルト・コロombo(イタリア)
イタリア国立エネルギー研究機関総裁
Umberto Colombo
(Chairman, The Italian National Commission for Nuclear and Alternative Energy Sources)

1985

カール・E・セーガン(アメリカ)
コーネル大学教授
Carl E. Sagan
(Professor, Cornell University)

1986

西澤潤一(日本)
東北大学教授
Jun-ichi Nishizawa
(Professor, Tohoku University)

1987

ジャン・ドーセ(フランス)
コレージュ・ド・フランス教授
Jean Dausset
(Professor, Collège de France)

1988

パオロ・マリア・ファゼラ氏(イタリア)
欧州共同体(EC)委員会
Paolo Maria Fasella
(Professor, Commission of the European Communities)

1989

ロトフィ・A・ザデー(アメリカ)
カリフォルニア大学バークレー校教授
Lotfi Asker Zadeh
(Professor, University of California, Berkeley)

1990

フライ・オットー(ドイツ)
シュツツガルト大学教授
Frei Otto
(Professor, University of Stuttgart)



財団
法人 本田財団

東京都中央区八重洲2-6-20(ホンダ八重洲ビル)
〒104 電話03-3274-5125, ファクシミリ03-3274-5103

HONDA FOUNDATION

6-20, Yaesu 2-chome, Chuo-ku, Tokyo 104, Japan
Tel. 03-3274-5125, Telefax. 03-3274-5103



財団
法人 本田財団

東京都中央区八重洲2-6-20(ホンダ八重洲ビル)
〒104 電話03-3274-5125, ファクシミリ03-3274-5103

HONDA FOUNDATION

6-20, Yaesu 2-chome, Chuo-ku, Tokyo 104, Japan
Tel. 03-3274-5125, Telefax. 03-3274-5103

緒に乗せて下さい。

「ああ 本田さん」―般若の実践者―

東京工業大学名誉教授

森 政弘

本田さんは卓抜な次元で仏教を把握し実践された方だった。

霊・啓示・いのち・死後……といった連念的次元を超えて、核心、般若の智慧が湧き出ておられた。つまり仏教にさえもとらわれておられなかった。ある時

本田さん 「わしは宗教はやらない。」

森 「どうしてですか？」

本田さん 「だって、一つの宗教を信じると、ほかの宗教に悪いからな。」

そんなこと申されながら、またある時、私をお呼びになって、「アフリカに技術援助をすることになったが、これまでの欧米や日本のような問題のある技術は、持つて行くべきではない。もうこれからは仏教的な精神でやらないと、とてもだめだ」と思うが、君ひとつ……と。

まさに般若の理、「仏教 即非仏教 是名仏教」の体得者と、お見受けした。だから、講演の終りには、「今お話したことは、みんな嘘です」と。

合掌

本田宗一郎氏の思い出

上智大学教授

柳瀬陸男

本田さんのお付き合いは、一九七三年に上智大学から名誉学位を贈呈した折りと、一九八七年から本田財団のかかわりあいで、お目にかかるようになってからの数年間の短い期間でしたが、そのひとつひとつの思い出が、美しい珠玉の鎖のように心に残っております。学位贈呈式のご挨拶の

原稿に朝三時まで手を入れておられたこと、帰りに、パーティーの裏方のコックさんたちに忘れずにお礼を言って帰られた事など、つい最近になって伺い、いかにも本田さんらしい逸話として、そのお人柄を偲びました。

「心のキリスト者 (Anima naturaliter Christiana)」という言葉にまことにふさわしい方であられたとしみじみ思いながら、永遠の安らぎをお祈り致します。

日本放送協会解説委員

山室英男

本田さんは、一言で云うとリベラリストだったのだと、私は信じております。本田さんは、大臣とか官僚とか、いわゆる権威というものに反発し統治とか管理と云う思想を嫌いました。身分や肩書を無視して、個人の人格を尊重し、若い人たちを愛し、平和を愛し、他人の思想に寛容で、いつも人の話から何かを学ぼうという、そういうリベラリストでした。飄々として拘らずという、その外見上の振舞いを支えていたものは、意外に強靱な、人間に対する善意であり、宗教的と言ってもよいくらいの、人間愛だったのだと思います。

だから「葬式」というものに対する非妥協的な姿勢の中に私は、真のリベラリストを、或る感動をもって確認した思いしております。

日本国内もさることながら、むしろ海外で本田さんを惜しむ声が高いのも実はその点にあるのだと私は考えております。

埼玉大学教授

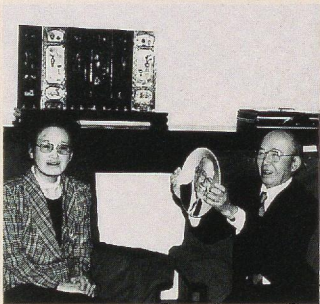
吉村 融

私たちの深く敬愛してやまない本田さんが亡くなられた。いまだにその実感が無い。本田財団の研究會や本田賞の授賞式に伺うと、「いらっしやい

……どうも有難う」と今にも例の人懐こい笑顔で温かく声をかけて下さりそんな気がしてならない。言葉では表現できぬ寂しさを禁じえない。

私の大学院は、政策研究を専門とすることから、我が国の経済力、とくに製造業を中心とした産業の国際競争力の高さを故に、外国の政府職員や研究者が、そのミラクルの秘密を知ろうとして研究にくる。それに対して私などは、明治以降、今日に至るまで、政府の展開してきた産業政策という非人格的なものの役割を重要視しながら説明するというタイプに属する。しかし本田さんのお話を伺ったり行動をみているうちに、我が国の産業発展のダイナミズムのなかに立現われる偉大な個人の影響力を無視しては説明のつかぬことがあることに気付かせられた。その時代時代の伝統的通念や政府の態度に敢然と立向い、そのユニークな創造的観念を貫き通した偉大な個性の起業家たち、渋沢栄一、岩崎彌太郎、小平浪平……といった日本経済の近代化の担い手たちに言及しないと説明はできない。戦後の産業の現代化という大きな社会発展のうねりのなかで、本田さんの生涯はまさにそのような偉大な個人の第一に挙げられるのではなからうか。本田さんがアメリカの自動車の殿堂入りを果たされた時の、暖かいスピーチのテープが忘れられない。いづれ我が国の産業の近代化・現代化の担い手たちの殿堂に、渋沢や小平と並んで、本田さんが入られることを信じて、晩年の暖かいお人柄を想い起こすこの頃である。

*文章については、いただいたものをそのまま使用しているため、タイトルのあるものがないものがあります。



の童顔が忘れられないけれど、このときの旅行でも本田さんは、中国と中国人について、しばしば核心を衝く認識を言葉の端々に示され、私は改めて本田さんに敬意を抱いたのである。

中央新光監査法人代表社員

中瀬宏通

私が故本田宗一郎顧問とお近づきになったのは本田財団の監事に就任して以来であり、残念ながら若かりし頃のハツラツとした勇姿を存じあげず、すでに世の中の酸いも甘いも知りつくされ、枯れた人格をおもちになってからである。

二十才近く年令が異なると、自分がその年令に達した時、尊敬する人の姿にまでなっているかどうかが気になるものである。顧問のゴーイングマイウェイでありながら、すべての人びとに愛される人間像の一つでも身につけられればと思っただけなのに、忽然と亡くなられてしまった。後は顧問の足跡を忘れないようにするのみで、お教を請うことができないのが残念でならない。もともと、たとえ健在であられても、恐らく「君の思うようにはしたまえ。ハハハア。」と答えられたであろう。安らかに、安らかにお眠りを。

多摩大学 経営情報学部長

中村秀一郎

本田さんに初めてお会いしたのは、七十三年日経流通新聞に連載中だった経営者論の取材のためだったと思う。その晩ご馳走になったときのことである。西銀座の小料理屋の二階に上るやいなや本田さんが階下に向かって「おかみ、おれの運転手にめしを喰わせろ」と大声で叫ばれたのは、びっくりした。まわりの人たちにいきとどいたくばりをされる方という印象を持ったのである。

八十六年中国社会科学学院と本田財団との共催に

よる「技術文明」に関するシンポジウムのさい、本田さん主催のパーティーが北京のシエラトンホテルで開かれたことである。宴がお開きになったとき本田さんは会場の一角で演奏していた楽団の前に足早に行かれて、「皆さんご苦労さんでした」と挨拶されたのには感動した。中国の偉い人たちが驚いたようである。楽団のメンバーは大喜び。本田さんは多くの人たちに支えられて自分がある、という自覚をたえず持ち続けられた方であった。

『オレの脳を手で掴んでみたいな』

東京大学名誉教授・国立大阪病院長

古川俊之

本田さんの夢物語に「オレの脳はどうなってるんだらうね。エンジンの設計を考えていると、頭の中にエンジンができてドドドドッと動くんだよ。音も振動も感じるんだよ。そいつを鋳型に写して仕上げると、脳の中にあつた時と同じ性能なんだね。だから脳の中のエンジンに手をつまめたらもつとまわくと思うんだがなあ」という奇抜な話がある。それではと脳のコンピュータ断層像を撮影してさしあげた。何と年齢相応の変化は動脈硬化傾向のみ、その他には老人性の変化の兆しが全くない立派な脳で、流石は何百万人にひとり稀有な才能の証拠と感嘆した。もつともご本人は「いや、オレは自分の脳の中のエンジンに触りたいんで、写真で脳を見せられても嬉しくない、と素っ気ない反応であった。本田さんは天上の科学技術村で、ご自分の脳の中のエンジンを思う存分テストしておられるのであろうか。

歴史上の事実にも真剣な故本田さんを憶う

(財)国策研究会会長

法眼晋作

本田さんは昭和五十八年十月、国策研究会の会員懇談会において、「私の教育論」と題する講演をされた。

この講演のなかで本田さんは、南京における日本軍による大虐殺の事実に触れられ、聴衆のなかから細川隆元氏が「大虐殺は事実ではない」と反論したが、本田さんは歴史の教訓とは過去の事実を歪曲せぬことから発せねばならないとして、細川さんの反論を堂々として反駁された。

本田さんのこの態度に対し、わが国策研究会の会員から賞賛の拍手が高く鳴り響いた。

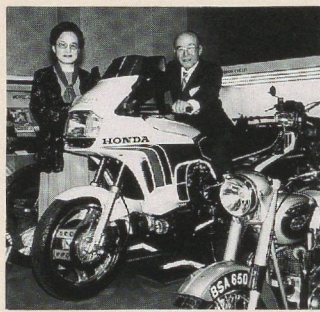
都合の悪い事を強いて公にせぬ事は、決してわが国の進歩と発展に役立つものではなく、国民大衆を欺く以外の何物でもないのである。

本田宗一郎氏のこと

東京大学・先端科学技術研究センター教授

村上陽一郎

もし本田財団に関係をもたなかったら、私ごときが本田さんにお目にかかれることなどなかったに違いない。デイスカヴァリーズ・シンポジウムが海外で開かれるとき、あるいは、本田賞授賞式の席上などで、私共にもきさくに話かけられる本田さんは、まことに天真爛漫、いたずらつこの趣きが横溢していたが、その背後に本場の仕事をなす遂げた人だけが持つ鋭い目がいつも感じられ、それが怖いようでもあった。最後の機会となった九十二年六月のボンのシンポジウムで一緒に話を聞いた際、「先生方を随分こき使ってしまったなあ、ねえ先生」といつになくしみじみとした口調でおっしゃったのが、今も耳に残っている。何をおっしゃいます、少なくとも私は楽しいことばかりでした、と返事を返したものの、本田さんの目にある怖さはなかった。本田さん、彼の世に自動車はあります。なかつたら造っておいて、いつか一



らない。作っておきさえすれば、流れは自然に調整される。だが少くとも当初の設計者にはそのような発想はなかった。出口と入口はいつしよにあるものという観念に捉われていたからである。天才的飛躍とは、このような自由さを言うのであろう。心より御冥福をお祈りしたい。

あくまで陽性だった本田さん

東北女子大学学長

辻村 明

本田さんは私の郷土の先輩でもあり、ホンダの「やらまいか」精神（浜松地方の方言で「やろうじゃないか」の意）というのは非常によくわかる。浜松地方は空っ風の強いところで、そのために有名な凧揚げ祭もおこなわれるのだが、温暖な静岡県には珍らしく、気性の激しいところである。

そのために、浜松地方からは多くの世界的な企業が輩出してきたが、積極的で「前向き」の姿勢を最もよく体現されていたのは本田さんであろう。しかも気さくで、ざっくばらん——ニコニコしながら、自分の頭をポンと叩き、「頭が空っぽのほうがいい、何でも吸収できていいですよ」と、学者先生を相手に戯けた顔をされていたのが懐しい。本田さんはあくまでも陽性であった。

本田最高顧問の生き方に学ぶ

法政大学教授

寺野寿郎

ある本で読んだが、人間の生き甲斐を突き詰めると次の三つに集約されるそうだ。一つは創造の喜びで、人は好奇心を燃やして新しい知識を吸収する時、あるいは新しい問題に挑戦して創意工夫を凝らす時、すべての苦しみを忘れて充実感に満たされる。第二は美に対する感動で、自然でも芸術でも音楽でも優れたものに接した時、我々はそ

れに没入すると同時に生きていることの有り難みを痛感する。第三は他人に対する奉仕だそうだ。

身体を動かさない程の重病人でも、看護者の労力を少しでも減らすことに努力した時、いい知れぬ自己満足を感じると思う。この三つのうち一つでも達成できれば人生の達人であろうが、本田さんはこのすべてを実行された稀な方であったとつくづく思う。

お礼の会で本田さんの笑顔の写真に添えて「幸福な人生を有難う」とあったが、私は「本当にそうですか」と心の中で相槌をうった。私の人生も残り少なくなってきたが、あの世でお会いする時に「及ばずながら勉強させて頂きました」と言えるようにしたいものである。

(社)国際交流サービス協会会長

都倉栄二

去る六月、本田財団の十回目のシンポジウムも無事終了、最後に本田さん主催の盛大な晩餐会がライン河を遙かに見下す丘の上、ペータスベルグの華麗な宴会場で催されました。私は若い時に五年間もボンの日本大使館に勤務したので、懐かしい思い出の場所でした。宴会後、広大なベランダで、つかの間のことだったので、本田さんが「都倉さん、あなたとは十数年前、スウェーデンでお知り合いになってからお世話にばかりなりまして」と突然言われ、小生は「とんでも御座いません。こちらこそ本当に御懇情に浴しておりました」と申しました。そうすると本田さんは、「私は気がなくなつてしまつて、この旅行が外国旅行の終りになるような気がするんですよ」と何気なく言われました。そこで私は「そんな気の弱いことをおっしゃらないで下さい。私は年一〜二回、ヨーロッパに来る用事があるので何時でもお供しますよ。何にも煩わせずに気軽に参りましょうよ」

と申しますと、本田さんは「有難う。だけど何となく心身共に弱りましてな。これまでの楽しい思い出には本当に感謝してます」と、小生とじっと目を合わせ、いつになく、長い堅い握手を交わしました。

これが、最後となりました。東京で「御礼の会」に参上させて戴きましたが、本当にアイディア溢れる、楽しい温かい末長く忘れ得ぬ方でした。合掌

本田さんの中国観

東京外国語大学教授

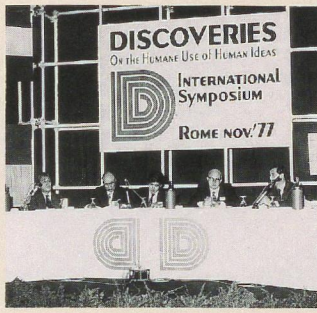
中嶋嶺雄

よく財界人のなかには、中国についての一家言を誇示する人がおられるけれど、上辺だけの中国通である場合が多い。

そうした中国認識とは違って、本田さんは中国人と中国社会の本質をしっかりとつかんでおられて、その点で何度か感銘を受けたことがある。

一九八六年夏の本田財団懇話会で「中国人とどのようにおつきあいすべきか」と題して私が話させていただき、「君子の交わりは淡きこと水のごとし、小人の交わりは甘きこと醴(甘酒)のごとし」という中国の諺を引いて、あまりべつたりした関係は避けるべきだと申しあげたことがあった。すると最前列に座っておられた本田さんが発言を求められ、「先生、わたしや中国人というのは、なかなかもんだと思えますよ。しぶといちうか、こすいちうか大変なもんで……」と本田さん一流の中国観を披露された。その見方は、まさに中国と中国人を十分にとらえきつたものであった。

本田さんとは、その年の十一月下旬、本田財団の北京セミナーにも御一緒した。お陰で釣魚台の国賓館に泊まることのでき、会議のあとは杭州へ飛んで晩秋の西湖を遊覧した。湖畔の楼外楼で本物の地場の杭州料理を満喫されたときの本田さん



私が本田さんに魅力を感じたのは、その国際感覚が机上のものでなく、自らの手で物を作り上げ、肌で経験した知識の積み重ねによるものであることでした。

本田さんへの追悼文

建築家

菊竹清訓

本田賞が、一九九〇年フライ・オートー(独)博士に出されたことが強く印象に残る。Eco-Techno-100の思想が建築や文化構築の領域にまで拡大され、その必要性が指摘されたことは大変有意義であった。

本田さんの「日本人は自分の家を自分の思いどおりにつくれるのは幸せだ」という言葉は、住宅のストックのことはかりに夢中の日本社会に、建替によるフローの効果もみおとしてならないという警告で、この素直な発言をメタポリストとして私は心から歓迎したい。

私は何より技術者として、あらゆる問題に挑戦するその勇敢な精神力と、素晴らしい魅力的な行動力と、人間的な暖かさに裏付けられたその純粹さを心から愛し、尊敬してやまない。本当に人を楽しくさせてくださる方であった。

ひとの心を知る

(株)OUECK社長

小島章伸

夏休み中に接した本田さんの突然の訃報、それは私にとって大きなショックだった。もう本田さんのあの人なつかしい笑顔が見られない——悲しく、寂しい限りである。

長年のおつき合いの中で、私は本田財団や日仏クラブの仕事で何回か海外にご一緒する機会を持った。そのたびに感心させられたことは本田さん

の「ハメはずし」ぶりが日本の国内でも外国でも全く変わりなく、生地そのままを出し切っておられたことである。そしてとりわけ外国人の心をしつかりとらえてしまったように思う。技術者として、さらには経営者として常に「ひとの心を知る」との大切さを口にされていた本田さんだが、海外との交流ではそのことを身をもって実証された。われわれ日本人はもともと相手の立場に立つてものを考えることの手下手な国民だが、いま本田さんが逝かれて改めて教えられるところが多い。ご冥福を心からお祈り申し上げる次第である。合掌

多摩大学教授

白根禮吉

「天真爛漫」「天衣無縫」といった表現は、本田さんのために作られた言葉ではないだろうか。年回りのせい、明治生まれの卓越した大先輩のご指導を受ける幸運に恵まれてきたが、とりわけ本田さんとは国内だけではなく、パリ、ストックホルム、ロンドン、コロンバス、北京、ウィーン、そして、最後になったボンと、海外での行事に随伴する機会を重ね、その強烈な魅力の虜になった。

天下周知の業績は言わずもがな、きびしい「ホンモノ」指向の一面、周囲への細かな気配りによって国内外の人々に感動を与え、敬愛を集めた本田さんは、もう二度と日本からは生まれたい大きな存在であった。あの素敵な笑顔を思い浮かべると、心でできた空洞が日増しに広がる思いもしきりです。合掌

世界中から慕われた本田宗一郎氏

東京大学教授

鈴木増雄

今理工系の分野で活躍中の多くの人が若い頃作行会を通して本田さんにお世話になりました。覆

面て奨学金を出して下さっていた「足ながおじさん」が本田さんと藤沢さんとわかり、一九八四年七月七日にお礼を述べる会が盛大に開かれ、大勢の人が集まりました。私も恩恵を受けた一人です。本田さんは「皆さんの役に立つことで自分自身満足感を味わいたかっただけ」と照れておられましたが、若かった我々にとってどれだけ助けになったことか。ここに改めて感謝申し上げます。

また一九八九年九月に本田さんを組織委員長としてユーロパリア・日本祭がベルギーで開催されましたが、その一つのシンポジウムに参加した外国の学者達は本田さんに一目会っただけで満足し、彼の気取りのない人柄に皆すっかり魅せられていました。社葬のかわりに開かれた「お礼の会」には私はたまたま海外出張中で伺えなかったのが心残りですが、世界各国の新聞が本田さんの訃報を大きく報道しているのを知り、氏の偉大さを改めて感じ入りました。ここに「冥福をお祈り致します」。

東京大学教授

高階秀爾

本田さん(と呼ばせて頂く)は、何の飾りもてらいもなく、誰に対しても態度の変ることのない爽やかなお人柄であった。そして子供のよう、何事にも捉われない眼でものを見ることの出来た人である。おそらくそれが、あの多くの卓抜な発想の秘密であつたらう。

ある座談の折、悪名高い首都高速道路の渋滞が話題になったことがあった。その時本田さんは、言下に、最初の考えが間違っていたと言われた。「入口はあのままで、出口をもっと沢山つくってあげば良かったんだよ。言われてみればその通りで、あつけない程単純で、しかも合理的な解決法である。出口だけならゲートも不要だし人手もい



は、私の人生にとって、この上ない幸せであっただけに、本田さんを失った今、これからの日々の空しさが募る。

本田さんが社長を辞任されてはどなく、友人だった元副社長の故篠宮茂氏の推薦で、例のアユ釣りパーティーに招かれ、お目にかかったのが最初だった。

それから数年たった六月のある日、本田さん御夫妻と私は、当時のジスカー・ドスタン・フランス大統領にお目にかかるため、本田さんの発案でアメリカを経由して、コンコルドで大西洋上を超音速で飛んでいた。狭い機内だったが、コックピットを見学し、ワインを頂きながら、とりわけ上機嫌な本田さんと語り合った一時の流れを、今でも強烈に覚えている。

白い花ばなに囲まれ、清々しいまでにシンプルな本田宗一郎さんの祭壇を前にして、この時の動景の一コマと、本田さんの笑顔の写真が重なって、事の事実には驚き、うろたえ、愕然とし、
「どこにか、どこに、どう着陸すればよいかを考えてくれよ」
と言われた本田さんの言葉が響き渡り、私にとっても一つの輝いた時代が、ここに過ぎ去ったことを実感せざるを得なかった。いずれにしても、ローマからウィーン会議までの十年程にわたって、わがスーパースターとともに、本田財団主催によるシンポジウムの舞台作りの一端を、華やかに担わせて戴き、そのプロセスで多くの教訓を得たことは、これからの私の活き方に、この上なく影響するに違いない。

孤独なまでに自由な魂の炎をたぎらせ、世界の人々を魅了し続けた本田さんの「技術人精神」に共鳴し感動した日々を理想に、その継承と普及に、私なりの自由な立場で、微力ながら努めたいと思う。そんな思いからも、誠に勝手ながら本田財団

理事を、去る八月六日付で辞任させて戴いた。恐宿ながら本紙面を借りて、これまでご支援くださった本田技研工業株式会社はもとより、先輩や友人の方々をはじめ、財団関係の皆さんに心から御礼申し上げる次第である。本田さん本当に有り難う存じました。

東京大学名誉教授

渥美和彦

一九六三年、私が人工心臓に使うエンジンの相談で本田さんにお会いした時、本田さんはオートバイのエンジンの開発に夢中でした。私の話をウワの空できいて、すっかり忘れてしまいました。その後、十五年以上たって親しくなったある日、その話をすると、それは悪かった。その代わりに、オレが死んだらオレの心臓をあげよう」といわれた冗談が強烈な印象として残っています。人工心臓の研究は、文献も、材料も、資金も何もない状況で始めましたが、本田さんもそうでした。私は常々、研究者は哲学を持たねばならないと考えていました。それは、「人真似はしない」、「日本の技術でやる」、「成果を世界に問う」というものでした。これは本田さんの哲学と全く共通でした。

ユーモアと身振り手振りで、相手の心をつかみ魅了してやまない、超一流の国際人でした。今でも、本田さんがあの笑顔で、「先生、元気かい」とひよっこり出てこられるような気がしてなりません。御冥福をお祈りします。

東海大学教授

内田裕久

八月五日午後ウラジオストック沖を航行中、スイッチを入れたラジオから突然最高顧問御逝去の報をお聴きした。水素エネルギーのお話をさせていただいた時、「中学生のとき水素の実験でドカー

ンと爆発してひでーめにあった」とあの大声で楽しそうに語られた笑顔がいまも忘れられない。八十歳を越えられた方とは思えないようなあの大きながっしりした手で「がんばってくれよお」と背中をドーンと叩かれ、おもわず一歩前へ踏みだしてしまっただけ。気さくなお人柄、鮎釣りパーティーでのお心配り、財団の懇談会ではどんなテーマでもいつも最前列で一生懸命お聴きになられたお姿どれをみても既成のわくにはまらないホンダイズムの源泉をみせていただいた思いがする。

人間と科学のインターフェイスとしてあるべき技術開発の理想を追求された本田宗一郎氏の志が本田財団の発展的・創造的活動へと継承されることを念じつつ、心より御冥福をお祈りいたします。

DISCOVERIES

成蹊大学名誉教授

江守一郎

初めて本田宗一郎さんとお話しする機会に恵まれたのは、国際交通安全学会(IATSS)が一九七六年に初めて主催したデイスカバリーズ国際シンポジウムで、私が実行委員長をした時でした。

本田さんは、このシンポジウムの理念を「国境を越えて、世界の科学者が分け隔てなく肩を並べ、人間活動に纏わる諸問題について心置きなく話し合う場」と提案されました。私はこの理念に答えて、少なくともシンポジウムのタイトルはでかいものにして、と頭をひねって「Definition and Identification Studies on Convergence Of Values, Effects and Risks Inherent in Environmental Synthesis」の頭文字を取って「DISCOVERIES」と名付けました。このタイトルは大きな視野からみた環境作りの方向づけをデイスカブションしよう、という願いが込められており、その後本田財団に受けつがれて今日に至っています。



本田さんを偲ぶ

本田さんを偲んで

本田財団理事長

下田武三

三十年前、本田技研の海外工場第一号を建設する準備のため、ベルギーに來られた本田さんを、大使館にお迎えした初対面の時から、私は、本田さんの開けっぴろげで天衣無縫な人柄に強く牽きつけられた。

後年、本田さんの御寄附で創設された本田財団の理事長に就任方の要請を受けた時、私は、この財団の主要テーマたるエコ・テクノロジーに深く共鳴したこともさることながら、何よりも本田さんのお人柄に惹かれて、これをお引き受けする気になったのである。

爾來十余年、この財団は、民間の組織としては珍らしい程、高い水準の国際的な文化活動を内外に展開することが出来た。これは幸いに財団を圍繞して下さる多くの学者、文化人の御協力の賜であるが、何と云っても、本田さんの中心的存在が大きく物を言ったものであることは疑いを容れない。本田さんは、財団の設立以来、第一回の東京を除き、すべて外国の主要都市で催した九回の「デイスカヴァリーズ」国際シンポジウムのすべてに出席され、また西沢潤一博士以外はすべて外国人

である十一名の傑出した学者、技術者に、親しく「本田賞」を授与され、その他国内で催された多数の講演会の殆どすべてに出席して下さる等、財団の内外で催した行事に、最も積極的に参加して下さった。そして同席した多数の内外人を、その独特の笑顔で魅了し、その純真な性格について強い印象を残されたのである。

いま本田さんを喪い、無限の寂寞の感に把られるのを免れないが、他方、財団設立の初期から本田賞を技術のノーベル賞にしようと誓い合った初心に立ち返って、本田さん亡き後の財団を永遠に維持、発展させて行こうとの決意を固めつつある今日この頃である。

(社)日本野球機構セントラル野球連盟会長

川島廣守

本田さんのなつかしい風貌がいまいきいきとよみがえります。にこやかな大きな笑顔、ユーモアのある屈託のない独特のお話しぶりが目と心に焼き付いたままです。いつの財団懇談会でも、前列の席で真剣に講師の話しに聞き入っておられた。そのお姿に燃えるような技術人の精神(こころ)を觀てまいりました。

また、お会いするたびに人の心を理解しようと

努められるお気持ち、温かいまなざしを通して心に伝わってまいりました。いつも心の通うお方で、想い出は走馬灯の如く回り続けて止まりません。

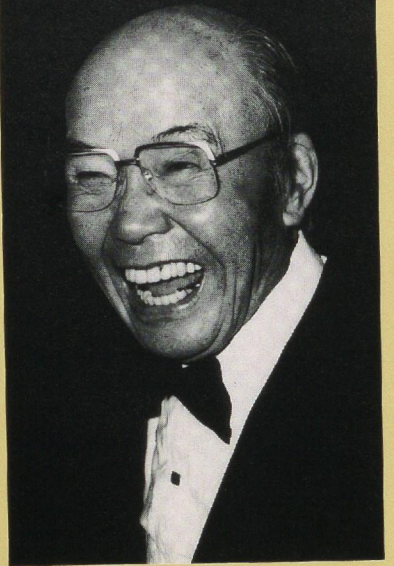
憶えば、ご一緒の海外旅行は一九八二年(昭和五十七年)オハイオ州コロンバスでのデイスカバリーズ国際シンポジウムへのお供が初めてでした。以来、お供は七回を算え、六月・ドイツ(ボン)の会議が最後となりました。帰路、フランクフルト空港での出発待ちの小一時間が忘れられません。楽しい思い出話しの末に、和顔愛語「そのままに」「川島さんなあ、ひとは人に可愛がられなければ駄目だな」とおっしゃった。急いで手帳にメモをとった。が、心にしみる語り口であった。ちゃんと見ておられたのである。傲りは心の大病だよという教えである。これからの人生への有難いお諭しである。これまでのお教えを感謝し、心からご冥福をお祈りいたします。 合掌

『本田宗一郎・スーパースター』からの教訓

合田周平

電気通信大学教授

この偉大にして、より人間として活きた本田宗一郎さんと出会い、心の深い領域でつながり、語らいや実践の場で、多くの触れ合いを持ったこと



本田さんを 徳

ぶ

本田財団が設立されてから間もなく十四年目を迎えるようになっています。今年度は当財団の創始者である本田宗一郎さんを亡くして、初めての本田賞授与式を迎えることになりました。今回の授与式にあたり、生前ご親交頂いておりました本田財団の役員と評議員の方々から、故人を偲んで回想文をお寄せ頂きましたので、ここに慎んでご紹介させて頂きます。

HONDA FOUNDATION

財団法人 本田財団





設立者 本田宗一郎
Founder Soichiro Honda

Honda Foundation



設立趣意書

Objective of the HONDA FOUNDATION

現代社会は、今世紀における急速な技術革新により、生産技術の改良、交通、運輸、通信手段の発達等により、高度の経済成長を持続し、飛躍的な繁栄を達成してきました。その繁栄は、さらに生活様式の変革、行動範囲の拡大など、人間生活におけるいくつかの革命的要因をもたらしました。

しかし、そのような技術革新と経済成長は、スピードが早まれば早まるほど、一方において、環境破壊や公害問題、都市の過密化、人口食糧問題、人種民族間の精神的ギャップの拡大など、深刻かつ複雑な問題を急速に派生させることになりました。

もちろん、これらの問題を解決するために、これまでも、いろいろ真剣な努力が続けられてきました。しかし、これらの問題の原因は、現代文明の諸要素を複雑に反映したものにほかならないため、これらの解決に当っては、従来とはまったく発想の次元を異にした、何らかの新しい接近方法を必要としています。

そのためには、個別の問題について性急な解決策を探るのではなく、国際的かつ学際的に広く英知と努力を結集して、現代文明の再評価を行い、その成果を真に人類の福祉と平和に役立たせ、より高度な社会を出現させる努力が必要です。

このような観点から広く内外の学者、研究者、専門家を含むあらゆる人々が現代文明の現状及び将来のあり方について自由に討議し、研究する場として、国際交流やシンポジウム、研究会の開催、研究・教育・普及その他の活動に対する褒賞及び助成、現代文明の成果を活用する調査研究等を行うことを目的とした財団法人本田財団を設立し、時代の要請に即応した事業活動を活発に展開し、もって人間性あふれる文明の創造に寄与しようとするものです。

Modern society has achieved greater prosperity than ever, thanks to sustained high economic growth which has been made possible through a rush of technological innovations in production, traffic, transportation, communications and other activities. We are experiencing revolutionary changes in our way of life, and in our changing life-style we have also expanded our horizons.

This achievement, made at a fast pace, has had negative effects too: environmental destruction, pollution, urban density, population explosion, food shortages, growing nationalism plus a number of other deep-rooted, complex issues.

Serious efforts have been made to resolve these problems. Each of them, however, is a kaleidoscopic reflection of different elements of modern civilization, and thus requires a completely new approach in the search for a resolution.

A makeshift resolution serves no purpose. Wisdom and effort must be pooled on an international level, and through an interdisciplinary approach to the analysis of modern civilization, the results can be used for the promotion of human welfare and happiness. In such a way must we strive to create a higher level of humane society.

In order to provide the opportunity for scholars, researchers and specialists from all walks of life, irrespective of nationality, to meet together and freely discuss the present state and the future of our civilization, the HONDA FOUNDATION sponsors international exchange, symposia and study groups, and offers prizes and awards for the promotion of research, education and other such activities, and also carries on its own study and research, making use of the achievements of modern civilization, the FOUNDATION was established with such objectives in mind, and by extending its own activities to fulfil the requirements of the modern age, it contributes towards the creation of a truly humane civilization.

A handwritten signature in black ink that reads "Takeso Shimoda". The signature is written in a cursive style with a long horizontal stroke at the end.

理事長 下田武三
President Takeso Shimoda

Honda Foundation

財団の活動——「エコ・テクノロジー」の提唱—— Advocacy of Milestones in the History of the HONDA FOUNDATION: "Eco-Technology"

人間尊重の文明を創造することは、今日、われわれ全人類にとっての大きな願望です。それは、現代に生きる多くの知識人、とりわけ科学技術に携わる人々の相互協力によって、はじめて可能になりうるものです。

本田財団は、この理念をもとに、ディスカバリーズ国際シンポジウムを開催してきました。第1回、1976年に東京で始まり、第9回、1987年のウィーンまで、世界各国の多くの学者や専門家が、自由に討議する場を提供してきました。

そして、これらの討議をもとに、当財団の設立趣旨である、「人間性あふれる文明の創造に寄与する」ためには、人間社会に真に役立つ技術を確立することが、最も重要であるとの認識に至り、第4回のストックホルムシンポジウムの際に、ディスカバリーズ宣言がなされ、今後の活動内容を示しました。

それは、当財団が、従来の効率と利益のみを追求する技術でなく、人間活動を取りまく環境全体との調和をはかった真の技術——新しい技術概念「エコ・テクノロジー」を提唱し、この概念を確立・普及させるために、次の3つの活動をすることと致しました。

1) ディスカバリーズ国際シンポジウムの開催

「エコ・テクノロジー」の観点に立ち、世界各国の学者・専門家による国際シンポジウムを開催します。

2) 本田賞の授与

「エコ・テクノロジー」の観点から顕著な業績をあげた個人またはグループに、国籍を問わず、年間1件贈呈するもので、副賞として1,000万円が贈られます。

3) 技術・文化を中心とした国際交流の推進

「エコ・テクノロジー」を確立・普及させ、国際的にお互いの技術・文化の理解を深めるため、適時にセミナー、研究会等を開催します。

The creation of a humane civilization is a great dream of mankind. It can be realized only through the joint efforts of modern-day intellectuals, particularly those engaged in technology.

The HONDA FOUNDATION, on this basis, has sponsored the DISCOVERIES Symposia. Starting with the 1st Symposium held in Tokyo in 1976 to the 9th Symposium held in Vienna in 1987, many scholars and specialists from all over the world have gathered and openly discussed various themes.

As a result of these symposia, there is a growing understanding that the development of technology that can truly contribute to human society is vital in the "Creation of a Humane Civilization," the objective of the HONDA FOUNDATION. Consequently, a DISCOVERIES declaration was issued on the final day of the 4th Symposium in Stockholm to announce future activities.

The declaration was based upon the objective of establishing a technology, in a true sense, that aims at harmony with the overall environment surrounding human activities rather than mere efficiency and profit. For the establishment and diffusion of this new concept of technology, "eco-technology," activities in the following three areas were proposed:

1. The DISCOVERIES International Symposia of scholars and specialists from all over the world for realization of "eco-technology" will be held.
2. A Honda Prize has been established, to be awarded annually an individual or an organization, irrespective of nationality, for a distinguished achievement in the field of "eco-technology." The prize includes the sum of ¥10,000,000.
3. International seminars and workshops will be held as needed to establish and diffuse the "eco-technology" and to deepen mutual understanding in the field of technology and culture.

※ディスカバリーズ(DISCOVERIES): 「発見」という英単語の複数形であると同時に "Definition and Identification Studies on Conveyance Of Values, Effects and Risks Inherent in Environmental Synthesis" (環境全体の中で人間活動に何が問題かを発見する) という意味の英文の頭文字を並べた造語でもある。

※エコ・テクノロジー(Eco-Technology): エコロジー(Ecology: 生態学)とテクノロジー(Technology: 科学技術)とを組み合わせた造語。

*The term "DISCOVERIES" is, besides being the plural form of the word "Discovery," a term formed by the initials of the words "Definition and Identification Studies on Conveyance Of Values, Effects and Risks Inherent in Environmental Synthesis."

本田財団のあゆみ

HONDA FOUNDATION History

■昭和52年12月27日設立
 ■Founded on December 27, 1977

1976年10月	第1回ディスカバリーズ国際シンポジウム(東京)	October, 1976	1st DISCOVERIES International Symposium in Tokyo
1977年5月 ~6月	ディスカバリーズ活動を広めるため、本田宗一郎氏、 欧州各国を訪問	May-June, 1977	Soichiro Honda tours Europe to promote the cause of DISCOVERIES
1977年11月	第2回ディスカバリーズ国際シンポジウム(ローマ)	November, 1977	2nd DISCOVERIES International Symposium in Rome
1978年10月	第3回ディスカバリーズ国際シンポジウム(パリ)	October, 1978	3rd DISCOVERIES International Symposium in Paris
1978年11月	第1回本田財団東京会議	November, 1978	1st HONDA FOUNDATION Tokyo Symposium
1979年8月	第4回ディスカバリーズ国際シンポジウム (ストックホルム)	August, 1979	4th DISCOVERIES International Symposium in Stockholm
1980年11月	1980年度本田賞授与式 第2回本田財団東京会議	November, 1980	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1980 2nd HONDA FOUNDATION Tokyo Symposium
1981年11月	1981年度本田賞授与式	November, 1981	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1981
1982年5月	第5回ディスカバリーズ国際シンポジウム (オハイオ州コロンバス)	May, 1982	5th DISCOVERIES International Symposium in Columbus, Ohio
1982年11月	1982年度本田賞授与式	November, 1982	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1982
1983年4月	第6回ディスカバリーズ国際シンポジウム(ロンドン)	April, 1983	6th DISCOVERIES International Symposium in London
1983年9月	第1回本田・アニエリ両財団共催セミナー(トリノ)	September, 1983	1st Seminar Co-sponsored by the HONDA FOUNDATION and AGNELLI FOUNDATION in Torino
1983年11月	1983年度本田賞授与式	November, 1983	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1983
1983年12月	マレーシア国際シンポジウム(クアラルンプール)	December, 1983	Malaysia International Symposium in Kuala Lumpur
1984年5月	第2回本田・アニエリ両財団共催セミナー(東京)	May, 1984	2nd Seminar Co-sponsored by the HONDA FOUNDATION and AGNELLI FOUNDATION in Tokyo
1984年8月	第7回ディスカバリーズ国際シンポジウム (メルボルン)	August, 1984	7th DISCOVERIES International Symposium in Melbourne
1984年11月	1984年度本田賞授与式	November, 1984	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1984
1985年9月	第3回本田・アニエリ両財団共催セミナー(トリノ)	September, 1985	3rd Seminar Co-sponsored by the HONDA FOUNDATION and AGNELLI FOUNDATION in Torino
1985年10月	第8回ディスカバリーズ国際シンポジウム (ブリュッセル)	October, 1985	8th DISCOVERIES International Symposium in Brussels
1985年11月	1985年度本田賞授与式	November, 1985	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1985
1986年10月	第4回本田・アニエリ両財団共催セミナー(東京)	October, 1986	4th Seminar Co-sponsored by the HONDA FOUNDATION and AGNELLI FOUNDATION in Tokyo
1986年11月	1986年度本田賞授与式 本田財団・中国社会科学院日本研究所共催セミナー (北京)	November, 1986	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1986 Seminar Sponsored by the HONDA FOUNDATION with the cooperation of the Institute of Japanese Studies of the Chinese Academy of Social Sciences in Beijing.
1987年7月	第9回ディスカバリーズ国際シンポジウム(ウィーン)	July, 1987	9th DISCOVERIES International Symposium in Vienna
1987年11月	1987年度本田賞授与式	November, 1987	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1987
1987年12月	本田財団・オーストラリア科学工学アカデミー共催 セミナー(東京)	December, 1987	Seminar sponsored by the HONDA FOUNDATION with the cooperation of Australian Academy of Technological Sciences and Engineering

Honda Foundation

本田財団のあゆみ

HONDA FOUNDATION History

1988年9月	第5回本田・アニェリ両財団共催セミナー（トリノ）	September, 1988	The 5th seminar co-sponsored by the HONDA FOUNDATION and AGNELLI FOUNDATION in Torino
1988年11月	1988年度本田賞授与式	November, 1988	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1988
1989年9月 ～10月	ユーロパリア89ジャパンの一環として科学技術シンポジウムを共催（ブラッセル、ツールーズ、ヴァレーゼ、ベルリン、リスボン）	September-October, 1989	Co-sponsored the symposiums of Science & Technology "Europalia 89 Japan". (Brussels, Toulous, Varese, Berlin, Lisbon)
1989年11月	1989年度本田賞授与式	November, 1989	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1989
1990年11月	1990年度本田賞授与式	November, 1990	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1990
1991年6月	第10回ディスカバリーズ国際シンポジウム（ボン）	June, 1991	10th DISCOVERIES International Symposium in Bonn
1991年8月	設立者本田宗一郎顧問死去（5日）	August, 1991	Founder Soichiro Honda died.
1991年11月	1991年度本田賞授与式	November, 1991	Conferring Ceremony of the Honda Prize 1991



第1回ディスカバリーズ国際シンポジウム'76東京 The 1st DISCOVERIES International Symposium 1976 Tokyo



1976年10月、第1回シンポジウムは、東京で開催されました。テーマは「人間の知恵と交通」。狭義の「交通問題」の枠をこえ、現代社会にとって、また子孫にとって、交通とは何かについて、あらゆる専門分野から学際的・文明論的アプローチが試みられました。

このシンポジウムを契機に、国際的に「科学技術と人間社会の調和」のために広く英知を結集する、いわば「思考のオリンピック」といふべきディスカバリーズ活動の精神が新たに認識されました。

The 1st Symposium was held in Tokyo in October, 1976. The theme was "An intelligent human approach to traffic problems". The theme was discussed from an interdisciplinary point of view by specialists representing a cross-section of academic fields. The meaning of "traffic" was explored as an integral part of our civilization, as well as its significance both for our society of the present day and for our posterity.

A new awareness emerged at the Symposium: Namely, that underlying the DISCOVERIES activities should be the concept of the Thinkers' Olympics. For the "Harmony of Scientific Technology and Human Society", wisdom should be pooled from all available sources.



第2回ディスカバリーズ国際シンポジウム'77ローマ The 2nd DISCOVERIES International Symposium 1977 Rome



1977年11月、ローマに舞台を移した第2回シンポジウムでは、「現代文明の巨大危機への認識と対応」について、熱心な討議が重ねられました。同時に、欧米、アジア、アフリカの15か国から集まった参加者のすべにより、次の2点が確認されました。

- 1) 現代社会が直面している人口、食糧、エネルギー資源、人的相互理解などの諸問題の解決に、ディスカバリーズ活動が指向している学際的アプローチが不可欠であること。
- 2) 新しい科学技術的アプローチ、とりわけコンピュータを基礎としたデータ分析の方法は、伝統的な、人間に関する諸科学と結合すべきであること。

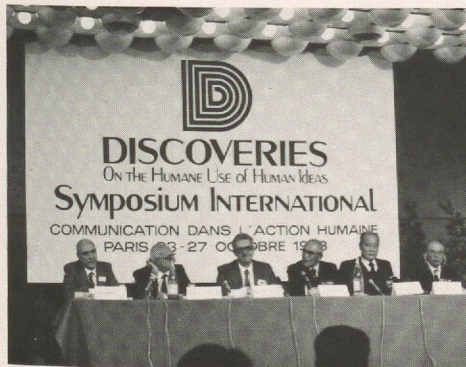
During the 2nd DISCOVERIES International Symposium, held in Rome in 1977, animated discussions took place on the theme of "Review to cope with megacrisis".

Through the participation of the representatives of 15 countries in Europe, the U.S.A., Asia and Africa who gathered at the Symposium, the following two conclusions were drawn:

- 1) The interdisciplinary approach adopted by DISCOVERIES is indispensable in resolving the various problems faced by modern society, such as population, food shortages, energy resources and mutual understanding.
- 2) New scientific approaches and in particular data analysis by computer, should be used together with traditional scientific methods related to mankind.



第3回ディスカバリーズ国際シンポジウム'78パリ The 3rd DISCOVERIES International Symposium 1978 Paris



1978年10月、パリで開かれた第3回ディスカバリーズ国際シンポジウムのメインテーマは「人間活動におけるコミュニケーション」、サブテーマは「コミュニケーションとは何か」「コミュニケーションの発達」「コミュニケーションその理解」「コミュニケーションと社会的、経済的現象」。

世界14か国51名の学者、技術者たちが国境を越え、自由活発に議論し合う様子は、パリのマスコミでも取りあげられ話題になりました。

The principal theme of the 3rd DISCOVERIES International Symposium, held in Paris in 1978, was "Communication in Human Activity." The sub-themes were "What is Communication?," "The Development of Communication," "Society and Communication," and "Communication and Socio-economic Phenomena."

A total of 51 scholars and technical experts representing 15 countries participated and their lively free discussions attracted the attention of the Paris media.

Honda Foundation



第4回ディスカバリーズ国際シンポジウム'79ストックホルム The 4th DISCOVERIES International Symposium 1979 Stockholm



1979年8月、ストックホルムで開かれた第4回国際シンポジウムは、グスタフ・スウェーデン国王の開会宣言によって幕が開けられました。

「人間と情報社会——情報技術の役割」をメインテーマとし、世界12か国から科学者、政治学者、社会学者、哲学者など各分野の専門家39名が、「機械」「個人」「社会とコンピュータ」の3つのサブテーマで活発な討議を行いました。

また、最終日に本田財団の下田理事長が「ディスカバリーズ宣言」を行い、当財団の今後の活動内容が示されました。

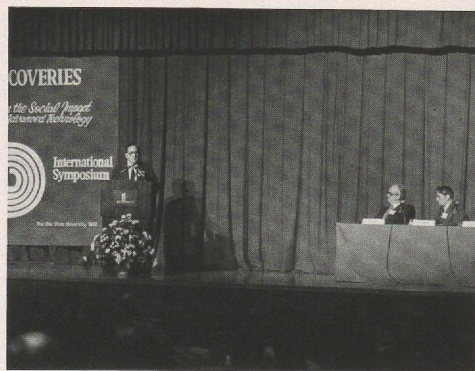
His majesty, the king of Sweden delivered the opening address at the 4th DISCOVERIES International Symposium in Stockholm in August, 1979.

With the main theme, "Man and Society—Automated for Information Processing," 39 specialists, in such fields as science, political science, sociology, and philosophy gathered from all over the world to discuss the three sub-themes: "Machines," "Individuals," and "Society and Computers."

On the final day of the Symposium, President Shimoda of the HONDA FOUNDATION proclaimed the "DISCOVERIES Declaration," in which the future activities were indicated.



第5回ディスカバリーズ国際シンポジウム'82オハイオ州コロンバス The 5th DISCOVERIES International Symposium 1982 Columbus, Ohio



1982年5月、オハイオ州コロンバス市での第5回シンポジウムでは、レーガン米大統領のメッセージをローズ・オハイオ州知事が読まれて開会されました。

「先端技術の社会的影響」をメインテーマとし、日米欧9か国から150名(うち討議参加者は52名)の学者・技術者が「コンピュータとコミュニケーション」「ロボットと生産の自動化」「先端技術と人間の健康」「先端技術の社会的影響」の4つをサブテーマとして活発な討議を行いました。

最も今日的な問題である先端技術が社会に与える影響と、人間が先端技術に使われるのではなく、人間が技術を駆使するには、何をなすべきかという大きな問題に挑戦した会議となりました。

The 5th DISCOVERIES International Symposium was opened in May 1983 with the presentation of a message from President Reagan by Governor Rose of the state of Ohio.

With the main theme, "The Social Impact of Advanced Technology," 150 scholars and technical experts (52 of them participated in the discussion) from Japan, the U.S., and 7 European countries gathered to openly discuss the four sub-themes, "Computers and Robots," "Robotics and Automated Production Controls," "Advanced Technology and Human Health," and "The Social Implications of Advanced Technology."

The Symposium was directed at the most current problem of the social effects of advanced technology and discussed what man should do not to be used by advanced technology but to have full control over it.



第6回ディスカバリーズ国際シンポジウム'83ロンドン The 6th DISCOVERIES International Symposium 1983 London



1983年4月、ロンドンで開かれた第6回国際シンポジウムは、エジンバラ公フィリップ殿下の開会の辞で始まりました。

「現代技術の社会的・文化的課題」をメインテーマとし、「西欧における現代技術」「北米における先端技術」「発展途上国における技術と文化」「東南アジアと日本における技術の社会的側面」をサブテーマに、講演および討議が行われました。参加者は、13か国から150名（うち討議参加者49名）、世界銀行副総裁クレンシ氏、サウジアラビア石油相ヤマニ氏、フィアット社副会長アニェリ氏などの講演もあり、盛況なシンポジウムとなりました。

Prince PHILIP, Duke of EDINBURGH, delivered the opening address at the 6th DISCOVERIES International Symposium in London in April, 1983.

With the main theme, "Social and Cultural Challenge of Modern Technology," lectures and discussions were held on the sub-themes, "Modern Technology in the Context of Western Europe," "Advanced Technology in North America," "Technology and Cultures in Developing Countries," and "Social Aspects of Technology in Southeast Asia and Japan." The Symposium ended successfully with 150 participants (49 of them participated in the discussion) from 13 different countries, including Dr. Moeen Qureshi, Senior Vice-President Finance, World Bank, Sheikh Yamani, Minister of Petroleum and Mineral Resources, Saudi Arabia, Dr. Umberto Agnelli, Vice-Chairman, FIAT, etc.



第7回ディスカバリーズ国際シンポジウム'84メルボルン The 7th DISCOVERIES International Symposium 1984 Melbourne



1984年8月、メルボルンで開かれた第7回国際シンポジウムは、マレー州総督の開会の辞で始まりました。

「人類に役立つ資源と技術」をメインテーマとし、世界12か国から学者、技術者など各分野の専門家41名が「学界・産業・政府の役割」「西太平洋諸国間の技術に関する競争・相互補完・相互協力」「発展途上国の技術的・文化的ニーズと義務」「先進国、特に欧州・アメリカ・日本」をサブテーマに講演および討議を行いました。発展途上国および先進国それぞれのなすべきことなどについて活発な討議が行われ、初めて日欧米を離れて開催された成果が見られた会議となりました。

The 7th DISCOVERIES International Symposium, held in Melbourne in August 1984, began with the opening address by Mr. Murray, Governor of Victoria.

The main theme for the Symposium was "The Use of Resources and Technology in the Interest of Mankind." 41 specialists of each field, including academicians and engineers from 12 countries, lectured on and discussed the sub-themes of: "The Roles of Academia, Industry and Government," "The West Pacific Technological Competition, Complementarity and Cooperation," "Technological and Cultural Needs and Obligations of the Less Developed Countries" and "Highly Developed Countries especially Europe the Americas and Japan." Active discussions were held on what should be done by the developed and developing countries. The significance of the Symposium being held for the first time in a country other than the U.S., Europe or Japan was reflected in its results.

Honda Foundation



第8回ディスカバリーズ国際シンポジウム'85ブリュッセル The 8th DISCOVERIES International Symposium 1985 Brussels



1985年10月、ブリュッセルで開かれた第8回国際シンポジウムは、ブリュッセル自由大学I.プリゴジン教授を委員長に、王立科学アカデミーで開催されました。

「自然と人間活動の諸法則」をメインテーマとし、世界20か国から94名が参加し、第3の波のアルヴィン・トフラー氏、小児マヒ・ワクチンのソーク博士などによる王宮でのボードワン国王への御前講演も含め、先端技術にかかわる学際的な課題や、来たるべき文明新時代における「文化と技術」についてさまざまな発表がなされ、活発な学術的討議が行われました。

The 8th DISCOVERIES International Symposium was held at the Royal Academy of Belgium in Brussels, Belgium, in October 1985 under the chairmanship of Professor I. Prigogine of Free University of Brussels.

Ninety-four people from 20 countries around the world participated in the symposium under the main theme of "Laws of Nature and Human Conduct." A variety of presentations were given on "culture and technology" for the forthcoming new era of civilization as well as interdisciplinary challenge of advanced technology, followed by lively academic discussion.

Mr. Alvin Toffler, author of "The Third Wave," and Dr. J. Salk, celebrated for his work on polio vaccine, also lectured before the King Baudouin at the palace.



第9回ディスカバリーズ国際シンポジウム'87ウィーン The 9th DISCOVERIES International Symposium 1987 Vienna



1987年7月、ウィーンで開かれた第9回国際シンポジウムは、「多様化時代の人間環境」をメインテーマとし、ホーフブルク宮殿国際会議場に於いて、世界13か国52名の討議参加者が、技術的・経済的活動の拡大に伴い、ますます複雑化している文化と、その一面である技術が、人間社会と自然環境の間にどのような相互作用を引き起こすかについて、技術/産業活動、社会機構および環境政策等の視点から幅広い討議を行いました。

The 9th International Symposium was held at the international conference hall of Hofburg Palace in Vienna in July 1987 under the main theme of "Complexities of the Human Environment." 52 people from 13 countries participated in the symposium to hold wide-ranging discussions on what types of interactions will be generated between human society and the natural environment due to the influence of culture, which has become increasingly complex accompanying the expansion of technical/economic activities, and the culture's facet-technology. The participants exchanged their opinions from the viewpoints of technical/industrial activities, environmental policies and social organizations.



第10回ディスカバリーズ国際シンポジウム'91ボン The 10th DISCOVERIES International Symposium 1991 Bonn.



1991年6月、再統一なったばかりのドイツ、ボンに於いて、アレキサンダー・フォン・フンボルト財団の協力を得て、「基礎生命科学と人間社会」をメイン・テーマとする第10回ディスカバリーズ国際シンポジウムを開催致しました。3日間にわたったシンポジウムには、生命科学とその周辺領域の専門家や法律・倫理・哲学・工学などの学者及び行政や企業サイドからの参加者も含め、世界各国から約40名の専門家の出席を得て、最先端の生命科学の現状及びそれらが社会や人類の将来に与える影響などについての活発な討論が行われました。

The 10th DISCOVERIES International Symposium was held in Bonn, newly reunited Germany, in June 1991, under the main theme of "Basic Life Sciences and Human Society" with cooperation of the Alexander von Humboldt Foundation.

Attendants on the three-day symposium were some 40 specialists from all over the world including life scientists, specialists of surrounding academic fields, scholars of law, ethics, philosophy and engineering, government officials and company representatives. They actively discussed the current circumstances of leading life sciences and its effect on the future of the society and human being.

Honda Foundation

本田・アネリ両財団共催セミナー

Seminar Co-Sponsored by the HONDA FOUNDATION and AGNELLI FOUNDATION



アネリ財団の所在地イタリアのトリノと、東京を相互に開催地として過去5回、日本とイタリア、日本と欧州との今日的課題をテーマに二国間セミナーを開催しました。

1983年9月(トリノ)

「技術と社会変革—日伊の比較」

1984年5月(東京)

「FUTURAMA—インダストリアル・クリエイティビティー日本とイタリア」

1985年9月(トリノ)

「自動化技術の社会経済的影響」

1986年10月(東京)

「ヨーロッパの科学技術と国際協力の見通し」

1988年9月(トリノ)

「EC統合問題」

Alternately in Tokyo and in Torino, Italy where the Agnelli Foundation is located, a two countries seminar has been held under the contemporary subject between not only Japan and Italy also Japan and Europe.

September 1983 (Torino)

“Technology and Social Changes -Comparison of Japan and Italy”

May 1984 (Tokyo)

“FUTURAMA- Industrial Creativity - Japan and Italy”

September 1985 (Torino)

“Automation Technology and Socio-Economic Consequences”

October 1986 (Tokyo)

“Perspective on the European Technology and International Cooperation”

September 1988 (Torino)

“EC unification in 1992”

日本 EUROPALIA 89 科学・技術シンポジウム JAPAN IN BELGIUM Science and Technology Symposium



ベルギーのブラッセルを中心に1989年秋、約3ヶ月にわたり開催された日本紹介の文化行事「ユーロパリア89ジャパン」の催事の一環として、ECのジョイント・リサーチ・センター他と共催で、科学技術に関する国際シンポジウムが開かれました。ベルギーをはじめ、フランス、イタリア、ドイツ、ポルトガルの各都市を巡り、それぞれのテーマで日本学術会議会長の近藤次郎氏や理化学研究所理事長の小田稔氏、京都大学名誉教授の岡本道雄氏他、内外の幅広い専門家70名の講演者を得、活発な意見交換を通じて日欧の理解を深めることができました。

As one of the events in “Europalia 89 Japan,” a cultural affair introducing Japan held mainly in Brussels, Belgium for 3-months in autumn, 1989, Honda Foundation co-sponsored a series of symposiums with EC, Joint Research Center, concerning Science and Technology. Visiting Brussels and several cities in France, Italy, Germany and Portugal, Dr. J. Kondo (President, Science Council of Japan), Dr. M. Oda (President, RIKEN), Prof. M. Okamoto (Professor Emeritus, Kyoto University) and other 70 interdisciplinary experts participated in symposiums and they exchanged their opinion to understand each other under the various themes.

マレーシア国際シンポジウム Malaysia International Symposium



1983年12月、マレーシアのクアラルンプール市で開かれた国際シンポジウムは、マハティール首相の開会の辞で始まりました。「技術・文化・発展」をメインテーマとし、本田財団・国際交通安全学会（日本）・マラヤ大学（マレーシア）・フェブライオ'74（イタリア）の共催により、4か国40名の討議参加者が、現地に役立つ技術移転をめぐり、文化・社会・経済・交通・教育などの視点から10のセッションで講演と討議を行いました。

The International Symposium, held in Kuala Lumpur, Malaysia in December 1983 started with the opening address by Prime Minister Mahathir.

At this Symposium, co-sponsored by the Honda Foundation, the International Association of Traffic and Safety Sciences (Japan), the University of Malaya (Malaysia) and Centro di Ricerca e Documentazione Febbraio '74 (Italy), the main theme was "Technology, Culture and Development." During 10 sessions, 40 participants from four countries lectured on and discussed the issue of the transfer of technology in the interest of the recipients from cultural, social, economic, traffic and educational points of view.

本田財団・中国社会科学院 日本研究所共催セミナー Seminar Sponsored by the HONDA FOUNDATION with the cooperation of the Institute of Japanese Studies of the Chinese Academy of Social Sciences.



1986年11月、中華人民共和国北京市で中国社会科学院日本研究所との共催により開かれたセミナーは、人民大会堂を会場に「技術文明と近代化」をテーマとし、最新技術と日中間の協力について両国から200名が参加して活発な討議が行なわれ、相互理解を深め、友好関係を発展させました。

A seminar sponsored by the HONDA FOUNDATION with the cooperation of the Institute of Japanese Studies of the Chinese Academy of Social Sciences was held at the National People's Congress Hall in Beijing, the People's Republic of China in November 1986 under the theme of "Technological Civilization and Modernization." A total of 200 participants from the two countries were involved in active discussions on the state-of-the-art technologies and bilateral cooperation, resulting in the further promotion of mutual understanding and friendship.

本田財団・オーストラリア科学工学アカデミー共催セミナー Seminar sponsored by the HONDA FOUNDATION with the cooperation of Australian Academy of Technological Sciences and Engineering(A.T.S.)



1987年12月、東京でオーストラリア科学工学アカデミー(A.T.S.)並びに社団法人未踏科学技術協会と共催で「オーストラリア～日本 先端材料技術」をテーマに、2国間交流セミナーが開催されました。

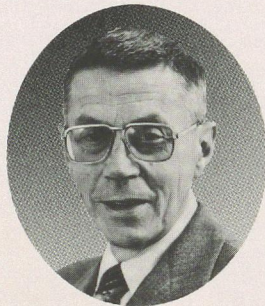
70名の参加者を得て、日豪の新素材研究者による講演と、両国の技術向上をめぐり活発な意見交換が行なわれました。

In December 1987, a two countries seminar jointly organized by the Honda Foundation, A.T.S. and the Society of Non-traditional Technology was held in Tokyo under the theme of "Australia and Japan/Advanced material technology."

The seminar was ended successfully with 70 participants exchanging their opinions about the progress of the technology in both countries, following the lectures by Japanese and Australian scholars of advanced materials.

Honda Foundation

本田賞受賞者 HONDA PRIZE Laureates



1980

グナー・ハンベリユース(スウェーデン)
スウェーデン王立理工学アカデミー会長
国内での指導的役割と各国工学アカ
デミーとの交流に貢献。

Gunnar Hambraeus
(Chairman, Royal Swedish Academy
of Engineering Sciences)

Professor Hambraeus has been playing a leading role, for many years, in bringing about close coordination among the Swedish public, academic and industrial sectors in the field of engineering sciences as well as in enhancing international collaboration in the same field among academic organizations of the industrial countries.

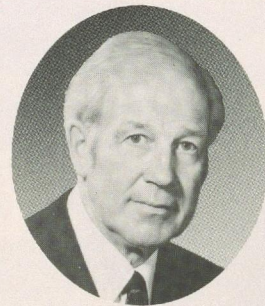


1981

ハロルド・チェスナット(アメリカ)
SWIIS財団
システム工学に於ける貢献と、技術
者の国際組織での指導的役割。

Harold Chestnut
(SWIIS Foundation, Inc.)

Dr. Chestnut has made great contributions to the promotion of Systems Engineering Research, both in academic and industrial sectors, as well as his leading role played for long years in various international organizations of engineers.



1982

ジョン・F・コールズ(イギリス)
ケンブリッジ大学名誉教授
自動制御技術および開発途上国への
技術移転に貢献し、技術者の国際組
織で指導的役割。

John F. Coales
(Professor Emeritus, University of
Cambridge)

Professor Coales has made great contribution to the advancement of the theory and industrial application of Automatic Control Technology both in academic and industrial sectors, and the promotion of transfer of technology to developing countries. He has also played a leading role for long years in various international organizations of engineers.

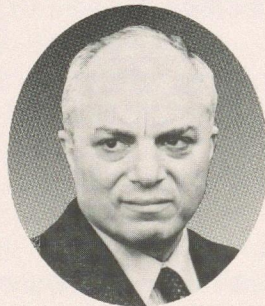


1983

イリヤ・プリコジン(ベルギー)
ブリュッセル自由大学教授
化学・物理学分野での独創的な理論を
実際面に応用し、環境問題に関する国
際活動で指導的な役割。

Ilya Prigogine
(Professor, Free University of Brus-
sels)

Professor Prigogine has made a significant contribution to the establishment of the original theories in the field of chemistry and physics and their application to the practical aspects such as urban development and traffic problems. He has also played a leading role for long years in various international activities concerning the environmental problems.

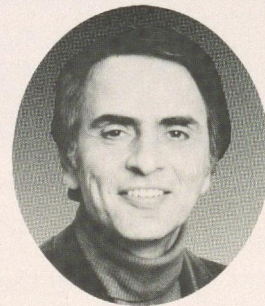


1984

ウンベルト・コロombo(イタリア)
イタリア国立エネルギー研究機関総裁
現代社会が直面している諸問題の解決
に寄与され、科学技術を人類の実生活
に活用することを実践。

Umberto Colombo
(Chairman, The Italian National
Commission for Nuclear and Alter-
native Energy Sources)

Mr. Colombo has made a significant contribution to the solution of various problems facing modern societies; and also in recognition of his contribution to the transfer of scientific technology from academic boundaries to practical applications in people's everyday lives.



1985

カール・E・セーガン(アメリカ)
コーネル大学教授
技術開発の場となった宇宙が人類にと
って身近な環境であることを明示され、
地球をより宇宙的な視座で捉えること
により、人類文明を新時代へと導く
科学技術研究の理論的基礎を確立。

Carl E. Sagan
(Professor, Cornell University)

Dr. Sagan has made a significant contribution toward ecotechnological exploration of space, as well as toward establishment of a theory of technological development for the new era of civilization, based on a more cosmic viewpoint.



1986

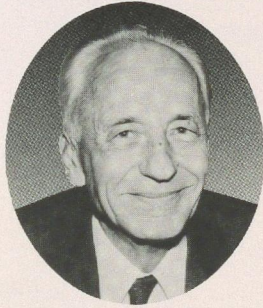
西澤潤一(日本)

東北大学教授

半導体電子工学とその応用分野における基幹的理論を構築するとともに、その実践に多大の貢献をされ、技術を人間愛と社会の発展のために活用。

Jun-ichi Nishizawa
(Professor, Tohoku University)

Professor Nishizawa has made a significant contribution to the establishment of basic theories in semiconductor and electronics engineering as well as in their applied fields, and also, to putting such basic theories into practice. He utilized technology for the sake of humanity and the development of society.



1987

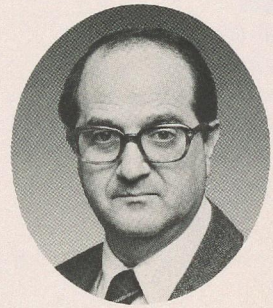
ジャン・ドーセ(フランス)

コレージュ・ド・フランス教授

科学技術がもたらす恩恵と弊害を明確にし、科学技術を人類と地球の将来のために活用する世界的な運動を展開。

Jean Dausset
(Professor, Collège de France)

Professor Dausset has promoted a worldwide movement called the "Universal Movement for Scientific Responsibility" as its leader in a bid to clarify the benefits and evils which may be brought by the advancement of science and technology so as to utilize science and technology for the future of mankind and the earth.



1988

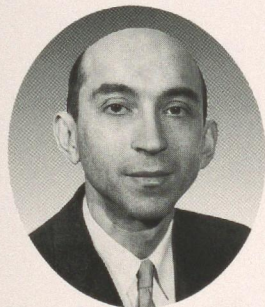
パオロ・マリア・ファゼラ氏(イタリア)

欧州共同体(EC)委員会

生命科学とその応用分野における卓越した研究業績を基盤として、現代社会における人間と科学技術の調和ある発展のために、国際的な幅広い実践的諸活動を展開。

Paolo Maria Fasella
(Professor, Commission of the European Communities)

Professor Fasella has achieved an outstanding research work in the field of life science and its applied areas and, also, done the extensive international activities which contributed greatly towards harmonious development between man and science in this modern world.



1989

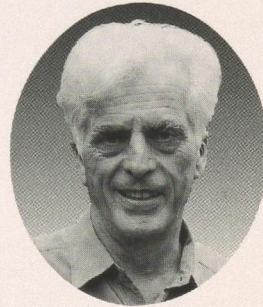
ロトフィ・A・ザデー(アメリカ)

カリフォルニア大学バークレー校教授

ファジー理論の提唱者として、その理論の発展のため国際的な諸活動を展開され、今後の情報化社会をより人間性のあふれるものへと導くために貢献。

Lotfi Asker Zadeh
(Professor, University of California, Berkeley)

As an advocate of Fuzzy Theory, Prof. Zadeh has been participating in activities around the world for the development of this theory, thereby contributing to leading the information oriented society of the future towards a more human direction.



1990

フライ・オットー(ドイツ)

シュツットガルト大学教授

膜構造建築と呼ばれる軽量建築の概念を確立し、この新しい手法を用いて、美しく豊かな人間環境の観念に即した数々の優れた建築作品を残した。

Frei Otto
(Professor, University of Stuttgart)

Prof. Otto, who established the concept of lightweight architecture referred to as a membrane structure, has presented many outstanding works of architecture utilizing such new methods and which reflect his concept of a beautiful and rich human environment.



1991

モンコンブ・S・スワミナタン(インド)

国際マングローブ生態系協会会長

インド亜大陸を食糧危機から救った「緑の革命」の実際上のリーダーとして、自然環境保護の分野でも国際的に精力的な活動を展開。

Monkombu S. Swaminathan
(President, International Society for Mangrove Ecosystems)

As an actual leader of green revolution which has saved the Indian subcontinent and its residents from a food crisis, he has worked actively and internationally in the field of environmental protection.

Honda Foundation

本田財団名簿

●名誉会員

エドアルド・カイアニエロ
(サレルノ大学学部長)
ジャン・クロード・シモン
(ピエール&マリー・キュリー大学教授)
エドワード・H・ジェニングス
(オハイオ州立大学総長)
コールドコート子爵
(フェローシップ・オブ・エンジニアリング会
長)
デーヴィッド・ザイドラー
(オーストラリア・アカデミー・オブ・テクノ
ロジカル・サイエンス・アンド・エンジ
ニアリング理事長)
ジャック・ソルヴェイ
(ソルヴェイ国際物理・化学研究所理事
長)

●理事長

下田武三
(常設仲裁裁判所裁判官)

●副理事長

川島廣守
(社)日本野球機構セントラル
(野球連盟会長)

●常務理事

佐々木俊夫

●理事

渥美和彦
(東京大学名誉教授)
大河原良雄
(社)経済団体連合会 特別顧問
白根禮吉
(多摩大学教授)
新開三千秋
(本田技研工業(株)取締役)
都倉栄二
(社)国際交流サービス協会会長
山室英男
(日本放送協会解説委員)
吉村融
(埼玉大学教授大学院政策科学研究科)

●監事

中瀬宏通
(中央新光監査法人代表社員)
塚本正義
(本田技研工業(株)監査役)

●顧問

岡村 昇
(本田技研工業(株)常任相談役)
杉浦英男
(本田技研工業(株)社友)
西田通弘
(本田技研工業(株)顧問)

原田隆夫
(本田技研工業(株)常任相談役)
法眼晋作
(財団策研究会会長)

●評議員

本田弁二郎
浅利慶太
(劇団四季主宰)
石井威望
(東京大学名誉教授)
内田裕久
(東海大学教授工学部)
江守一郎
(成蹊大学名誉教授)
川崎雅弘
(新技術事業団専務理事)

菊竹清訓
(建築家)

木村尚三郎
(東京大学名誉教授)

高坂正堯
(京都大学教授法学部)

小島章伸
(株)QUICK社長)

鈴木増雄
(東京大学教授理学部)

高階秀爾
(東京大学教授文学部)

辻村 明
(東北女子大学学長)

寺野寿郎
(法政大学教授工学部)

中嶋嶺雄
(東京外国語大学教授外国語学部)

中村秀一郎
(多摩大学経営情報学部長)

古川俊之
(国立大阪病院長)

村上陽一郎
(東京大学教授先端科学技術研究セン
ター)

森 政弘
(自在研究所所長)

●Honorary Fellows

Eduardo Caianiello
(Dean, University of Salerno)
Jean Claude Simon
(Professor, Pierre et Marie Curie
University)
Edward H. Jennings
(President, Ohio State University)
Viscount Caldecote
(President, The Fellowship of Engi-
neering)
David Zeidler
(President, Australian Academy of
Technological Sciences and Engi-
neering)
Jacques Solvay
(President, The International (Solvay)
Institutes of Physics and Chemistry)

●President

Takeso Shimoda
(Judge of the Permanent Court of
Arbitration)

●Vice-President

Hiromori Kawashima
(President of Central League)

●Managing Director

Toshio Sasaki

●Directors

Kazuhiko Atsumi
(Professor, Emeritus University of
Tokyo)

Yoshio Okawara
(Executive Advisor, KEIDANREN
/ Japan Federation of Economic
Organization)

Reikichi Shirane
(Professor, Tama Institute of Mana-
gement & Information Sciences)

Michiaki Shinkai
(Director, Honda Motor Co.,Ltd.)

Eiji Tokura
(Chairman, International Hospitality
and Conference Service Association)

Hideo Yamamuro
(News Commentator, NHK)

Toru Yoshimura
(Professor, University of Saitama,
Graduate School of Policy Science)

●Auditors

Hiromichi Nakase
(Managing Partner, Chuo Shinko
Audit Corporation)

Masayoshi Tsukamoto
(Statutory Auditor, Honda Motor
Co.,Ltd.)

●Advisors

Noboru Okamura
(Advisor, Honda Motor Co.,Ltd.)

Hideo Sugiura
(Fellow, Honda Motor Co.,Ltd.)

Michihiro Nishida
(Advisor, Honda Motor Co.,Ltd.)

Takao Harada
(Advisor, Honda Motor Co.,Ltd.)

Shinsaku Hogen
(President, The Research Institute For
Japan's National Policy)
Benjiro Honda

●Councillors

Keita Asari
(President, Shiki Theatrical Company)
Takemochi Ishii
(Professor, Emeritus University of
Tokyo)

Hirohisa Uchida
(Professor, Tokai University, Faculty
of Technology)

Ichiro Emori
(Professor, Emeritus Seikei University,
College of Technology)

Masahiro Kawasaki
(Senior Vice President, Research
Development Corporation of Japan)

Kiyonori Kikutake
(Architect)

Shosaburo Kimura
(Professor, Emeritus University of
Tokyo)

Masataka Kosaka
(Professor, Kyoto University, Faculty
of Law)

Akinobu Kojima
(President, QUICK Corp.)

Masuo Suzuki
(Professor, University of Tokyo,
Faculty of Science)

Shuji Takashina
(Professor, University of Tokyo,
Faculty of Literature)

Akira Tsujimura
(President, Tohoku Women's College)

Toshiro Terano
(Professor, Hosei University, Faculty
of Technology)

Mineo Nakajima
(Professor, Tokyo University of Fore-
ign Studies, Faculty of Foreign
Studies)

Hideichiro Nakamura
(Dean, Tama Institute of Manage-
ment & Information Sciences)

Toshiyuki Furukawa
(President, Osaka National Hospital)

Yoichiro Murakami
(Professor, University of Tokyo,
Research Center for Advanced
Science and Technology)

Masahiro Mori
(General Director, MUKTA Institute)



財団 本田財団
法人

東京都中央区八重洲2-6-20(ホンダ八重洲ビル)
〒104 電話03-3274-5125、ファクシミリ03-3274-5103

HONDA FOUNDATION

6-20; Yaesu 2-chome, Chuo-ku, Tokyo 104, Japan
Tel. 03-3274-5125, Telefax 03-3274-5103

HONDA FOUNDATION

財団法人 本田財団



設立者 本田宗一郎
Founder Soichiro Honda

Honda Foundation



設立趣意書

Objective of the HONDA FOUNDATION

■昭和52年12月27日設立

■Founded on December 27, 1977

現代社会は、今世紀における急速な技術革新により、生産技術の改良、交通、運輸、通信手段の発達等により、高度の経済成長を持続し、飛躍的な繁栄を達成してきました。その繁栄は、さらに生活様式の変革、行動範囲の拡大など、人間生活におけるいくつかの革命的変革をもたらしました。

しかし、そのような技術革新と経済成長は、スピードが早まれば早まるほど、一方において、環境破壊や公害問題、都市の過密化、人口食糧問題、人種民族間の精神的ギャップの拡大など、深刻かつ複雑な問題を急速に派生させることになりました。

もちろん、これらの問題を解決するために、これまでも、いろいろ真剣な努力が続けられてきました。しかし、これらの問題の原因は、現代文明の諸要素を複雑に反映したものにほかならないため、これらの解決に当っては、従来とはまったく発想の次元を異にした、何らかの新しい接近方法を必要としています。

そのためには、個別の問題について性急な解決策を探るのではなく、国際的かつ学際的に広く英知と努力を結集して、現代文明の再評価を行い、その成果を真に人類の福祉と平和に役立たせ、より高度な社会を出現させる努力が必要です。

このような観点から広く内外の学者、研究者、専門家を含むあらゆる人々が現代文明の現状及び将来のあり方について自由に討議し、研究する場として、国際交流やシンポジウム、研究会の開催、研究・教育・普及その他の活動に対する褒賞及び助成、現代文明の成果を活用する調査研究等を行うことを目的とした財団法人本田財団を設立し、時代の要請に即応した事業活動を活発に展開し、もって人間性あふれる文明の創造に寄与しようとするものです。

Modern society has achieved greater prosperity than ever, thanks to sustained high economic growth which has been made possible through a rush of technological innovations in production, traffic, transportation, communications and other activities. We are experiencing revolutionary changes in our way of life, and in our changing life-style we have also expanded our horizons.

This achievement, made at a fast pace, has had negative effects too: environmental destruction, pollution, urban density, population explosion, food shortages, growing nationalism plus a number of other deep-rooted, complex issues.

Serious efforts have been made to resolve these problems. Each of them, however, is a kaleidoscopic reflection of different elements of modern civilization, and thus requires a completely new approach in the search for a resolution.

A makeshift resolution serves no purpose. Wisdom and effort must be pooled on an international level, and through an interdisciplinary approach to the analysis of modern civilization, the results can be used for the promotion of human welfare and happiness. In such a way must we strive to create a higher level of humane society.

In order to provide the opportunity for scholars, researchers and specialists from all walks of life, irrespective of nationality, to meet together and freely discuss the present state and the future of our civilization, the HONDA FOUNDATION sponsors international exchange, symposia and study groups, and offers prizes and awards for the promotion of research, education and other such activities, and also carries on its own study and research, making use of the achievements of modern civilization, the FOUNDATION was established with such objectives in mind, and by extending its own activities to fulfil the requirements of the modern age, it contributes towards the creation of a truly humane civilization.

A handwritten signature in black ink that reads "Hironori Kawashima". The signature is written in a cursive, flowing style.

理事長 川島廣守
President Hironori Kawashima

財団の活動——「エコ・テクノロジー」の提唱—— Advocacy of Milestones in the History of the HONDA FOUNDATION: "Eco-Technology"

人間尊重の文明を創造することは、今日、われわれ全人類にとっての大きな願望です。それは、現代に生きる多くの知識人、とりわけ科学技術に携わる人々の相互協力によって、はじめて可能になりうるものです。

本田財団は、この理念をもとに、ディスカバリーズ国際シンポジウムを開催してきました。第1回、1976年に東京で始まり、第10回、1991年のボンまで、世界各国の多くの学者や専門家が、自由に討議する場を提供してきました。

そして、これらの討議をもとに、当財団の設立趣旨である、「人間性あふれる文明の創造に寄与する」ためには、人間社会に真に役立つ技術を確認することが、最も重要であるとの認識に至り、第4回のストックホルムシンポジウムの際に、ディスカバリーズ宣言がなされ、今後の活動内容を示しました。

それは、当財団が、従来の効率と利益のみを追求する技術でなく、人間活動を取りまく環境全体との調和をはかった真の技術——新しい技術概念「エコ・テクノロジー」を提唱し、この概念を確認・普及させるために、次の3つの活動を行うことと致しました。

1) ディスカバリーズ国際シンポジウムの開催

「エコ・テクノロジー」の観点に立ち、世界各国の学者・専門家による国際シンポジウムを開催します。

2) 本田賞の授与

「エコ・テクノロジー」の観点から顕著な業績をあげた個人またはグループに、国籍を問わず、年間1件贈呈するもので、副賞として1,000万円が贈られます。

3) 技術・文化を中心とした国際交流の推進

「エコ・テクノロジー」を確認・普及させ、国際的にお互いの技術・文化の理解を深めるため、適時にセミナー、研究会等を開催します。

The creation of a humane civilization is a great dream of mankind. It can be realized only through the joint efforts of modern-day intellectuals, particularly those engaged in technology.

The HONDA FOUNDATION, on this basis, has sponsored the DISCOVERIES Symposia. Starting with the 1st Symposium held in Tokyo in 1976 to the 10th Symposium held in Bonn in 1991, many scholars and specialists from all over the world have gathered and openly discussed various themes.

As a result of these symposia, there is a growing understanding that the development of technology that can truly contribute to human society is vital in the "Creation of a Humane Civilization," the objective of the HONDA FOUNDATION. Consequently, a DISCOVERIES declaration was issued on the final day of the 4th Symposium in Stockholm to announce future activities.

The declaration was based upon the objective of establishing a technology, in a true sense, that aims at harmony with the overall environment surrounding human activities rather than mere efficiency and profit. For the establishment and diffusion of this new concept of technology, "eco-technology," activities in the following three areas were proposed:

1. The DISCOVERIES International Symposia of scholars and specialists from all over the world for realization of "eco-technology" will be held.
2. A Honda Prize has been established, to be awarded annually an individual or an organization, irrespective of nationality, for a distinguished achievement in the field of "eco-technology." The prize includes the sum of ¥10,000,000.
3. International seminars and workshops will be held as needed to establish and diffuse the "eco-technology" and to deepen mutual understanding in the field of technology and culture.

※ディスカバリーズ(DISCOVERIES):「発見」という英単語の複数形であると同時に"Definition and Identification Studies on Conveyance Of Values, Effects and Risks Inherent in Environmental Synthesis"(環境全体の中で人間活動に何が問題かを発見する)という意味の英文の頭文字を並べた造語でもある。

※エコ・テクノロジー(Eco-Technology):エコロジ(Ecology:生態学)とテクノロジー(Technology:科学技術)とを組み合わせた造語。

*The term "DISCOVERIES" is, besides being the plural form of the word "Discovery," a term formed by the initials of the words "Definition and Identification Studies on Conveyance Of Values, Effects and Risks Inherent in Environmental Synthesis."

Honda Foundation



第1回ディスカバリーズ国際シンポジウム'76東京 The 1st DISCOVERIES International Symposium 1976 Tokyo



1976年10月、第1回シンポジウムは、東京で開催されました。テーマは「人間の知恵と交通」。狭義の「交通問題」の枠をこえ、現代社会にとって、また子孫にとって、交通とは何かについて、あらゆる専門分野から学際的・文明論的アプローチが試みられました。

このシンポジウムを契機に、国際的に「科学技術と人間社会の調和」のために広く英知を結集する、いわば「思考のオリンピック」というべきディスカバリーズ活動の精神が新たに認識されました。

The 1st Symposium was held in Tokyo in October, 1976. The theme was "An intelligent human approach to traffic problems". The theme was discussed from an interdisciplinary point of view by specialists representing a cross-section of academic fields. The meaning of "traffic" was explored as an integral part of our civilization, as well as its significance both for our society of the present day and for our posterity.

A new awareness emerged at the Symposium: Namely, that underlying the DISCOVERIES activities should be the concept of the Thinkers' Olympics, For the "Harmony of Scientific Technology and Human Society", wisdom should be pooled from all available sources.



第2回ディスカバリーズ国際シンポジウム'77ローマ The 2nd DISCOVERIES International Symposium 1977 Rome



1977年11月、ローマに舞台を移した第2回シンポジウムでは、「現代文明の巨大危機への認識と対応」について、熱心な討議が重ねられました。同時に、欧米、アジア、アフリカの15か国から集まった参加者のすべにより、次の2点が確認されました。

- 1) 現代社会が直面している人口、食糧、エネルギー資源、人的相互理解などの諸問題の解決に、ディスカバリーズ活動が指向している学際的アプローチが不可欠であること。
- 2) 新しい科学技術的アプローチ、とりわけコンピュータを基礎としたデータ分析の方法は、伝統的な、人間に関する諸科学と結合すべきであること。

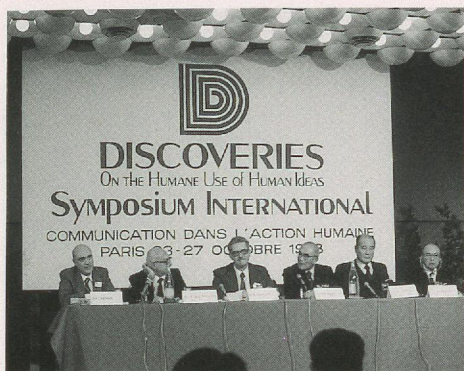
During the 2nd DISCOVERIES International Symposium, held in Rome in 1977, animated discussions took place on the theme of "Review to cope with megacrisis".

Through the participation of the representatives of 15 countries in Europe, the U.S.A., Asia and Africa who gathered at the Symposium, the following two conclusions were drawn:

- 1) The interdisciplinary approach adopted by DISCOVERIES is indispensable in resolving the various problems faced by modern society, such as population, food shortages, energy resources and mutual understanding.
- 2) New scientific approaches and in particular data analysis by computer, should be used together with traditional scientific methods related to mankind.



第3回ディスカバリーズ国際シンポジウム'78パリ The 3rd DISCOVERIES International Symposium 1978 Paris



1978年10月、パリで開かれた第3回ディスカバリーズ国際シンポジウムのメインテーマは「人間活動におけるコミュニケーション」、サブテーマは「コミュニケーションとは何か」「コミュニケーションの発達」「コミュニケーションその理解」「コミュニケーションと社会的、経済的現象」。

世界14か国51名の学者、技術者たちが国境を越え、自由活発に議論し合う様子は、パリのマスコミでも取りあげられ話題になりました。

The principal theme of the 3rd DISCOVERIES International Symposium, held in Paris in 1978, was "Communication in Human Activity." The sub-themes were "What is Communication?," "The Development of Communication," "Society and Communication," and "Communication and Socio-economic Phenomena."

A total of 51 scholars and technical experts representing 15 countries participated and their lively free discussions attracted the attention of the Paris media.



第4回ディスカバリーズ国際シンポジウム'79ストックホルム The 4th DISCOVERIES International Symposium 1979 Stockholm



1979年8月、ストックホルムで開かれた第4回国際シンポジウムは、グスタフ・スウェーデン国王の開会宣言によって幕が開けられました。

「人間と情報社会——情報技術の役割」をメインテーマとし、世界12か国から科学者、政治学者、社会学者、哲学者など各分野の専門家39名が、「機械」「個人」「社会とコンピュータ」の3つのサブテーマで活発な討議を行いました。

また、最終日に本田財団の下田理事長が、「ディスカバリーズ宣言」を行い、当財団の今後の活動内容が示されました。

His majesty, the king of Sweden delivered the opening address at the 4th DISCOVERIES International Symposium in Stockholm in August, 1979.

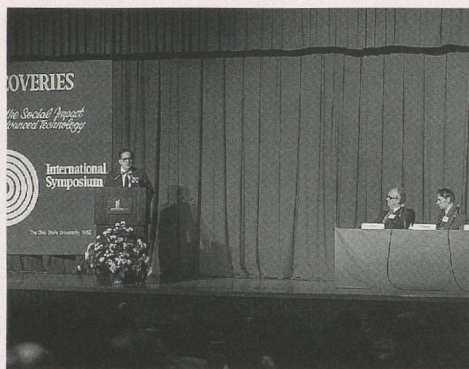
With the main theme, "Man and Society-Automated for Information Processing," 39 specialists, in such fields as science, political science, sociology, and philosophy gathered from all over the world to discuss the three sub-themes: "Machines," "Individuals," and "Society and Computers."

On the final day of the Symposium, President Shimoda of the HONDA FOUNDATION proclaimed the "DISCOVERIES Declaration," in which the future activities were indicated.

Honda Foundation



第5回ディスカバリーズ国際シンポジウム'82オハイオ州|コロンバス The 5th DISCOVERIES International Symposium 1982 Columbus, Ohio



1982年5月、オハイオ州コロンバス市での第5回シンポジウムでは、レーガン米大統領のメッセージをローズ・オハイオ州知事が読まれて開会されました。

「先端技術の社会的影響」をメインテーマとし、日米欧9か国から150名(うち討議参加者は52名)の学者・技術者が「コンピュータとコミュニケーション」「ロボットと生産の自動化」「先端技術と人間の健康」「先端技術の社会的影響」の4つをサブテーマとして活発な討議を行いました。

最も今日的な問題である先端技術が社会に与える影響と、人間が先端技術に使われるのではなく、人間が技術を駆使するには、何をなすべきかという大きな問題に挑戦した会議となりました。

The 5th DISCOVERIES International Symposium was opened in May 1983 with the presentation of a message from President Reagan by Governor Rose of the state of Ohio.

With the main theme, "The Social Impact of Advanced Technology," 150 scholars and technical experts (52 of them participated in the discussion) from Japan, the U.S., and 7 European countries gathered to openly discuss the four sub-themes, "Computers and Robots," "Robotics and Automated Production Controls," "Advanced Technology and Human Health," and "The Social Implications of Advanced Technology."

The Symposium was directed at the most current problem of the social effects of advanced technology and discussed what man should do not to be used by advanced technology but to have full control over it.



第6回ディスカバリーズ国際シンポジウム'83ロンドン The 6th DISCOVERIES International Symposium 1983 London



1983年4月、ロンドンで開かれた第6回国際シンポジウムは、エジンバラ公フィリップ殿下の開会の辞で始まりました。

「現代技術の社会的・文化的課題」をメインテーマとし、「西欧における現代技術」「北米における先端技術」「発展途上国における技術と文化」「東南アジアと日本における技術の社会的側面」をサブテーマに、講演および討議が行われました。参加者は、13か国から150名(うち討議参加者49名)、世界銀行副総裁クレン氏、サウジアラビア石油相ヤマニ氏、フィアット社副会長アニェリ氏などの講演もあり、盛況なシンポジウムとなりました。

Prince PHILIP, Duke of EDINBURGH, delivered the opening address at the 6th DISCOVERIES International Symposium in London in April, 1983.

With the main theme, "Social and Cultural Challenge of Modern Technology," lectures and discussions were held on the sub-themes, "Modern Technology in the Context of Western Europe," "Advanced Technology in North America," "Technology and Cultures in Developing Countries," and "Social Aspects of Technology in Southeast Asia and Japan." The Symposium ended successfully with 150 participants (49 of them participated in the discussion) from 13 different countries, including Dr. Moeen Qureshi, Senior Vice-President Finance, World Bank, Sheikh Yamani, Minister of Petroleum and Mineral Resources, Saudi Arabia, Dr. Umberto Agnelli, Vice-Chairman, FIAT, etc.

第7回ディスカバリーズ国際シンポジウム'84メルボルン The 7th DISCOVERIES International Symposium 1984 Melbourne



1984年8月、メルボルンで開かれた第7回国際シンポジウムは、マレー州総督の開会の辞で始まりました。

「人類に役立つ資源と技術」をメインテーマとし、世界12か国から学者、技術者など各分野の専門家41名が「学界・産業・政府の役割」「西太平洋諸国間の技術に関する競争・相互補完・相互協力」「発展途上国の技術的・文化的ニーズと義務」「先進国、特に欧州・アメリカ・日本」をサブテーマに講演および討議を行いました。発展途上国および先進国それぞれのなすべきことなどについて活発な討議が行われ、初めて日欧米を離れて開催された成果が見られた会議となりました。

The 7th DISCOVERIES International Symposium, held in Melbourne in August 1984, began with the opening address by Mr. Murray, Governor of Victoria.

The main theme for the Symposium was "The Use of Resources and Technology in the Interest of Mankind." 41 specialists of each field, including academicians and engineers from 12 countries, lectured on and discussed the sub-themes of: "The Roles of Academia, Industry and Government," "The West Pacific Technological Competition, Complementarity and Cooperation," "Technological and Cultural Needs and Obligations of the Less Developed Countries" and "Highly Developed Countries especially Europe the Americas and Japan." Active discussions were held on what should be done by the developed and developing countries. The significance of the Symposium being held for the first time in a country other than the U.S., Europe or Japan was reflected in its results.

第8回ディスカバリーズ国際シンポジウム'85ブリュッセル The 8th DISCOVERIES International Symposium 1985 Brussels



1985年10月、ブリュッセルで開かれた第8回国際シンポジウムは、ブリュッセル自由大学I.プリゴジン教授を委員長に、王立科学アカデミーで開催されました。

「自然と人間活動の諸法則」をメインテーマとし、世界20か国から94名が参加し、第3の波のアルヴィン・トフラー氏、小児マヒ・ワクチンのソーク博士などによる王宮でのボードワン国王への御前講演も含め、先端技術にかかわる学際的な課題や、来たるべき文明新時代における「文化と技術」についてさまざまな発表がなされ、活発な学術的討議が行われました。

The 8th DISCOVERIES International Symposium was held at the Royal Academy of Belgium in Brussels, Belgium, in October 1985 under the chairmanship of Professor I. Prigogine of Free University of Brussels.

Ninety-four people from 20 countries around the world participated in the symposium under the main theme of "Laws of Nature and Human Conduct." A variety of presentations were given on "culture and technology" for the forthcoming new era of civilization as well as interdisciplinary challenge of advanced technology, followed by lively academic discussion.

Mr. Alvin Toffler, author of "The Third Wave," and Dr. J. Salk, celebrated for his work on polio vaccine, also lectured before the King Baudouin at the palace.

Honda Foundation



第9回 ディスカバリーズ国際シンポジウム'87ウィーン The 9th DISCOVERIES International Symposium 1987 Vienna



1987年7月、ウィーンで開かれた第9回国際シンポジウムは、「多様化時代の人間環境」をメインテーマとし、ホーフブルク宮殿国際会議場に於いて、世界13カ国52名の討議参加者が、技術的・経済的活動の拡大に伴い、ますます複雑化している文化と、その一断面である技術が、人間社会と自然環境の間にどのような相互作用を引き起こすかについて、技術/産業活動、社会機構および環境政策等の視点から幅広い討議を行いました。

The 9th International Symposium was held at the international conference hall of Hofburg Palace in Vienna in July 1987 under the main theme of "Complexities of the Human Environment." 52 people from 13 countries participated in the symposium to hold wide-ranging discussions on what types of interactions will be generated between human society and the natural environment due to the influence of culture, which has become increasingly complex accompanying the expansion of technical/economic activities, and the culture's facet-technology. The participants exchanged their opinions from the viewpoints of technical/industrial activities, environmental policies and social organizations.



第10回 ディスカバリーズ国際シンポジウム'91ボン The 10th DISCOVERIES International Symposium 1991 Bonn.



1991年6月、再統一になったばかりのドイツ、ボンに於いて、アレキサンダー・フォン・フンボルト財団の協力を得て、「基礎生命科学と人間社会」をメイン・テーマとする第10回 ディスカバリーズ国際シンポジウムを開催致しました。3日間にわたったシンポジウムには、生命科学とその周辺領域の専門家や法律・倫理・哲学・工学などの学者及び行政や企業サイドからの参加者も含め、世界各国から約40名の専門家の出席を得て、最先端の生命科学の現状及びそれらが社会や人類の将来に与える影響などについての活発な討論が行われました。

The 10th DISCOVERIES International Symposium was held in Bonn, newly reunited Germany, in June 1991, under the main theme of "Basic Life Sciences and Human Society" with cooperation of the Alexander von Humboldt Foundation.

Attendants on the three-day symposium were some 40 specialists from all over the world including life scientists, specialists of surrounding academic fields, scholars of law, ethics, philosophy and engineering, government officials and company representatives. They actively discussed the current circumstances of leading life sciences and its effect on the future of the society and human being.



第11回ディスカバリーズ国際シンポジウム'93トロント The 11th DISCOVERIES International Symposium 1993 Toronto



1993年10月、カナダのトロントに於いてカナダ先端科学技術研究センターと共催で「健康の決定要因—繁栄、健康、幸福生活」をテーマとして第11回国際シンポジウムを行いました。

2日間にわたった公開のシンポジウムでは、特に先進国を事例として健康の決定要因の分析、保健政策、経済成長と社会的繁栄の役割の観点から活発な討議がなされ、今後の健康をめぐる世界的な課題のいくつかが浮き彫りにされました。

更に最終日の3日目は「人口の増加、資源の不足、社会の安定と人類の英知の重要性」をテーマにワークショップスタイルで開催され、寿命・デモグラフィ等人口問題の計量的な把握方法から資源の有限性、中国及び大都市での人口問題への対処に至る広範な領域に亘って活発な意見の交換が行われました。

The 11th international symposium was held in Toronto, Canada, in October 1993 under the theme--The DETERMINANTS OF HEALTH: Prosperity and Health and Well-being. The Honda Foundation organi-

zed the symposium under the joint auspices of the Canadian Institute for Advanced Research.

The symposium featured two days of meetings which were open to the public. There the participants actively exchanged views and ideas and analyzed factors which determine a person's state of health, mainly referring to cases in advanced countries. They also dealt with the role of public health policy, economic growth and social prosperity with regard to the state of people's health. The discussions helped the participants focus their attention on several global issues concerning health in the future.

A workshop was held on the final day of the three-day symposium under the theme-- POPULATION GROWTH, RESOURCE SCARCITY AND SOCIAL STABILITY: The importance of the Supply of Human Ingenuity. The topics actively taken up at the workshop ranged from methods to measure population problems, including life expectancy and demography, to limited availability of natural resources and how population problems have been dealt with in countries such as China and metropolises around the world.

日本 EUROPALIA 89 科学・技術シンポジウム JAPAN IN BELGIUM Science and Technology Symposium



ベルギーのブラッセルを中心に1989年秋、約3ヶ月にわたり開催された日本紹介の文化行事「ユーロパリア89ジャパン」の催事の一環として、ECのジョイント・リサーチ・センター他と共催で、科学技術に関する国際シンポジウムが開かれました。ベルギーをはじめ、フランス、イタリア、ドイツ、ポルトガルの各都市を巡り、それぞれのテーマで日本学術会議会長の近藤次郎氏や理化学研究所理事長の小田稔氏、京都大学名誉教授の岡本道雄氏他、内外の幅広い専門家70名の講演者を得、活発な意見交換を通じて日欧の理解を深めることができました。

As one of the events in "Europalia 89 Japan," a cultural affair introducing Japan held mainly in Brussels, Belgium for 3-months in autumn, 1989, Honda Foundation co-sponsored a series of symposiums with EC, Joint Research Center, concerning Science and Technology. Visiting Brussels and several cities in France, Italy, Germany and Portugal, Dr. J. Kondo (President, Science Council of Japan), Dr. M. Oda (President, RIKEN), Prof. M. Okamoto (Professor Emeritus, Kyoto University) and other 70 interdisciplinary experts participated in symposiums and they exchanged their opinion to understand each other under the various themes.

Honda Foundation

本田・アニエリ両財団共催セミナー

Seminar Co-Sponsored by the HONDA FOUNDATION and AGNELLI FOUNDATION



アニエリ財団の所在地イタリアのトリノと、東京を相互に開催地として過去5回、日本とイタリア、日本と欧州との今日的課題をテーマに二国間セミナーを開催しました。

1983年9月(トリノ)

「技術と社会変革—日伊の比較」

1984年5月(東京)

「FUTURAMA—インダストリアル・クリエイティビティー—日本とイタリア」

1985年9月(トリノ)

「自動化技術の社会経済的影響」

1986年10月(東京)

「ヨーロッパの科学技術と国際協力の見通し」

1988年9月(トリノ)

「EC統合問題」

Alternately in Tokyo and in Torino, Italy where the Agnelli Foundation is located, a two countries seminar has been held under the contemporary subject between not only Japan and Italy also Japan and Europe.

September 1983 (Torino) "Technology and Social Changes — Comparison of Japan and Italy" May 1984 (Tokyo) "FUTURAMA—Industrial Creativity — Japan and Italy" September 1985 (Torino) "Automation Technology and Socio-Economic Consequences" October 1986 (Tokyo) "Perspective on the European Technology and International Cooperation" September 1988 (Torino) "EC unification in 1992"

マレーシア国際シンポジウム

Malaysia International Symposium



1983年12月、マレーシアのクアラルンプール市で開かれた国際シンポジウムは、マハティール首相の開会の辞で始まりました。

「技術・文化・発展」をメインテーマとし、本田財団・国際交通安全学会(日本)・マラヤ大学(マレーシア)・フェブライオ'74(イタリア)の共催により、4か国40名の討議参加者が、現地に役立つ技術移転をめぐり、文化・社会・経済・交通・教育などの視点から10のセッションで講演と討議を行いました。

The International Symposium, held in Kuala Lumpur, Malaysia in December 1983 started with the opening address by Prime Minister Mahathir.

At this Symposium, co-sponsored by the Honda Foundation, the International Association of Traffic and Safety Sciences (Japan), the University of Malaya (Malaysia) and Centro di Ricerca e Documentazione Febbraio '74 (Italy), the main theme was "Technology, Culture and Development." During 10 sessions, 40 participants from four countries lectured on and discussed the issue of the transfer of technology in the interest of the recipients from cultural, social, economic, traffic and educational points of view.

本田財団・中国社会科学院 日本研究所共催セミナー

Seminar Sponsored by the HONDA FOUNDATION with the cooperation of the Institute of Japanese Studies of the Chinese Academy of Social Sciences.



1986年11月、中華人民共和国北京市で中国社会科学院日本研究所との共催により開かれたセミナーは、人民大会堂を会場に「技術文明と近代化」をテーマとし、最新技術と日中間の協力について両国から200名が参加して活発な討議が行なわれ、相互理解を深め、友好関係を発展させました。

A seminar sponsored by the HONDA FOUNDATION with the cooperation of the Institute of Japanese Studies of the Chinese Academy of Social Sciences was held at the National People's Congress Hall in Beijing, the People's Republic of China in November 1986 under the theme of "Technological Civilization and Modernization." A total of 200 participants from the two countries were involved in active discussions on the state-of-the-art technologies and bilateral cooperation, resulting in the further promotion of mutual understanding and friendship.

本田財団・オーストラリア科学工学アカデミー共催セミナー

Seminar sponsored by the HONDA FOUNDATION with the cooperation of Australian Academy of Technological Sciences and Engineering(A.T.S.)



1987年12月、東京でオーストラリア科学工学アカデミー(A.T.S.)並びに社団法人非伝統科学技術協会と共催で「オーストラリア～日本 先端材料技術」をテーマに、2国間交流セミナーが開催されました。

70名の参加者を得て、日豪の新素材研究者による講演と、両国の技術向上をめぐる活発な意見交換が行われました。

In December 1987, a two countries seminar jointly organized by the Honda Foundation, A.T.S. and the Society of Non-traditional Technology was held in Tokyo under the theme of "Australia and Japan/Advanced material technology."

The seminar was ended successfully with 70 participants exchanging their opinions about the progress of the technology in both countries, following the lectures by Japanese and Australian scholars of advanced materials.

台湾シンポジウム

Bilateral Symposium in Taiwan

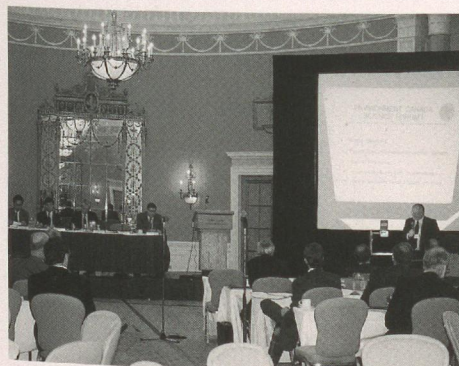


1992年9月台北で、「アジア太平洋地域の発展と科学技術～21世紀へ向けての課題」と題して、台湾の亚太科学技術協会と共催でシンポジウムを開催致しました。経済的発展の著しい台湾にあつて、多数の参加者による熱心な討議と友好親善の場が持たれました。

In Taiwan, Sep. 1992, bilateral symposium co-sponsored with Asia and Pacific council for science and technology was held under the theme "The development and science & technology in Asia and Pacific area towards the next century". In their remarkably economical prosperity, many participants joined and had a heated discussion, which promoted friendly relations.

オタワシンポジウム

Symposium on the Future of the Global Environment : the Role of Canadian and Japanese Science and Technology



1993年10月、カナダのオタワでカナダ王立協会との共催で「地球環境問題と科学技術—日加の役割」と題したシンポジウムを開催致しました。

このシンポジウムでは持続する成長の為の社会経済システム及び政治経済体制、宇宙からの環境のモニタリングとカナダに於ける気候変化の研究、世界環境に対する科学・技術政策のあり方及び日加の役割について活発な論議が展開されました。

The Honda Foundation and the Royal Society of Canada jointly sponsored the Symposium on the Future of the Global Environment: the Role of Canadian and Japanese Science and Technology in Ottawa, Canada, in October 1993.

Topics of discussion at the symposium included sustainability of Socio-Economic Systems and Politico-Economic Regimes, environment monitoring from outer space and the climate change program in Canada, science and technology policy toward the global environment, and the roles Japan and Canada should play in the areas concerned.

Honda Foundation

中欧諸国の経済・社会展望セミナー

Seminar on Economic and Social Prospects for Central European Countries



1996年6月、ウィーンでオーストリア銀行と共催で中欧セミナー「90年代及びそれ以後（21世紀）の中欧諸国の経済・社会の展望〈日本とオーストリアの協力の機会〉」を開催しました。このセミナーでは「将来の中欧諸国の経済発展に必要な技術移転、変化の激しい時代に即した中小企業の育成・振興、人材育成、環境への対応といった重要な緊急課題について、日本及び欧州諸国（中欧を含む）が共に認識し、将来の発展の方向性を探る」事を目的として活発な講演、討議が行われました。

In cooperation with the Bank Austria, the Honda Foundation held a seminar in Vienna on "Economic and Social Prospects for the CEFTA* Countries in the Nineties and Beyond: Opportunities for Cooperation with Japan and Austria" in June 1996.

The objectives of discussion were to raise the awareness of Japan and the countries of Europe - including Central Europe - of such important, pressing issues as the technology transfers required for the future economic development of Central European countries, cultivating and promoting small businesses that can meet the needs of a rapidly-changing era, fostering personnel in all sectors, and developing a response to environmental problems.

※CEFTA: Central European Free Trade Agreement.

北京大学・国際シンポジウム

Beijing University International Symposium



1998年10月、北京大学の創立100周年記念行事の一つとして、北京大学との共催で「21世紀に向けての中国の近代化—その課題と展望」をテーマとしたシンポジウムを開催しました。このシンポジウムでは、改革開放政策以来めざましい経済発展を遂げてきた中国の、今後の発展に向けた金融制度・税制・行政機構の改革、国有企業改革などの課題を、日中双方の経験を紹介しながら活発な討議が行われた。

In October 1998, as one of the centenary commemorative events of the foundation of the Beijing University, we organized jointly with the Beijing University a symposium on the theme of "Modernization of China in view of the Approaching 21st Century—its Tasks and Prospect." At this symposium, participants developed animated discussions on the tasks of reforming the financial and taxation system and administrative organization as well as the reforms of nationalized enterprises directed towards the future development of China that has achieved a dramatic economic development since the adoption of its reformative open policy by introducing the experiences of the participants on both sides.

本田賞受賞者
HONDA PRIZE Laureates 1980~1983

本田賞
HONDA PRIZE



本田賞は「エコ・テクノロジー」の観点から顕著な業績をあげた個人またはグループに、国籍を問わず、年間1件贈呈するもので、副賞として1,000万円が贈られます。

This prize is awarded annually to an individual or an organization, irrespective of nationality, for a distinguished contribution in the field of "Eco-Technology."

The prize includes a donation of ¥10,000,000.



1980

グナー・ハンベリユース (スウェーデン)
スウェーデン王立理工学アカデミー会長
国内での指導的役割と各国工学アカデミーとの交流に貢献。

Gunnar Hambræus
(Chairman, Royal Swedish Academy
of Engineering Sciences)

Professor Hambræus has been playing a leading role, in bringing about close coordination among the Swedish public, academic and industrial sectors in the field of engineering sciences as well as in enhancing international collaboration in the same field among academic organizations of the industrial countries.

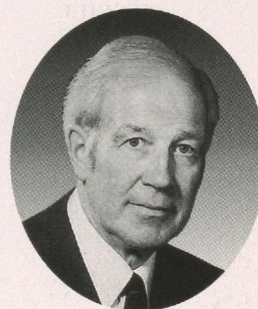


1981

ハロルド・チェスナット (アメリカ)
SWIIS財団
システム工学に於ける貢献と、技術者の国際組織での指導的役割。

Harold Chestnut
(SWIIS Foundation, Inc.)

Dr. Chestnut has made great contributions to the promotion of Systems Engineering Research, both in academic and industrial sectors, as well as his leading role played for long years in various international organizations of engineers.



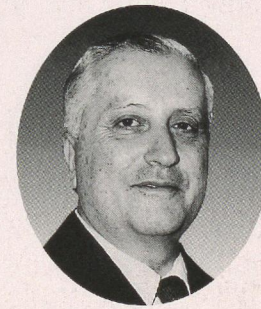
1982

ジョン・F・コールズ (イギリス)
ケンブリッジ大学名誉教授

自動制御技術および開発途上国への技術移転に貢献し、技術者の国際組織で指導的役割。

John F. Coales
(Professor Emeritus, University of
Cambridge)

Professor Coales has made great contribution to the advancement of the theory and industrial application of Automatic Control Technology both in academic and industrial sectors, and the promotion of transfer of technology to developing countries. He has also played a leading role for long years in various international organizations of engineers.



1983

イリヤ・プリコジン (ベルギー)
ブリュッセル自由大学教授

化学・物理学分野での独創的な理論を実際面に応用し、環境問題に関する国際活動で指導的な役割。

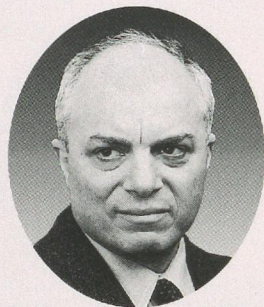
Ilya Prigogine
(Professor, Free University of
Brussels)

Professor Prigogine has made a significant contribution to the establishment of the original theories in the field of chemistry and physics and their application to the practical aspects such as urban development and traffic problems. He has also played a leading role for long years in various international activities concerning the environmental problems.

Honda Foundation

本田賞受賞者

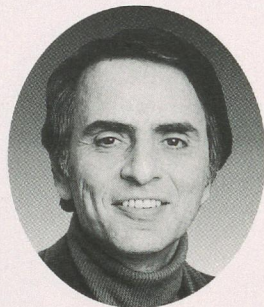
HONDA PRIZE Laureates 1984~1997



1984

ウンベルト・コロombo (イタリア)
イタリア国立エネルギー研究機関総裁
現代社会が直面している諸問題の解決に寄与され、科学技術を人類の実生活に活用することを実践。

Umberto Colombo
(Chairman, The Italian National Commission for Nuclear and Alternative Energy Sources)
Mr. Colombo has made a significant contribution to the solution of various problems facing modern societies; and also in recognition of his contribution to the transfer of scientific technology from academic boundaries to practical applications in people's everyday lives.



1985

カール・E・セーガン (アメリカ)
コーネル大学教授
技術開発の場となった宇宙が人類にとって身近な環境であることを明示され、地球をより宇宙的な視座で捉えることにより、人類文明を新時代へと導く科学技術研究の理論的基礎を確立。

Carl E. Sagan
(Professor, Cornell University)
Dr. Sagan has made a significant contribution toward ecotechnological exploration of space, as well as toward establishment of a theory of technological development for the new era of civilization, based on a more cosmic viewpoint.



1986

西澤潤一 (日本)
東北大学教授
半導体電子工学とその応用分野における基幹的理論を構築するとともに、その実践に多大の貢献をされ、技術を人間愛と社会の発展のために活用。

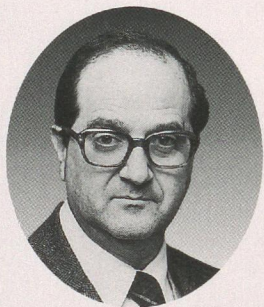
Jun-ichi Nishizawa
(Professor, Tohoku University)
Professor Nishizawa has made a significant contribution to the establishment of basic theories in semiconductor and electronics engineering as well as in their applied fields, and also, to putting such basic theories into practice. He utilized technology for the sake of humanity and the development of society.



1987

ジャン・ドーセ (フランス)
コレージュ・ド・フランス教授
科学技術がもたらす恩恵と弊害を明確にし、科学技術を人類と地球の将来のために活用する世界的な運動を展開。

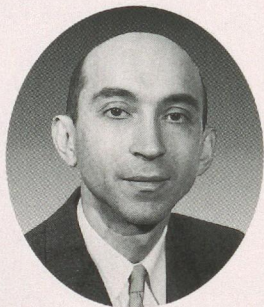
Jean Dausset
(Professor, Collège de France)
Professor Dausset has promoted a worldwide movement called the "Universal Movement for Scientific Responsibility" as its leader in a bid to clarify the benefits and evils which may be brought by the advancement of science and technology so as to utilize science and technology for the future of mankind and the earth.



1988

パオロ・マリア・ファゼラ氏 (イタリア)
欧州共同体 (EC) 委員会
生命科学とその応用分野における卓越した研究業績を基盤として、現代社会における人間と科学技術の調和ある発展のために、国際的な幅広い実践的諸活動を展開。

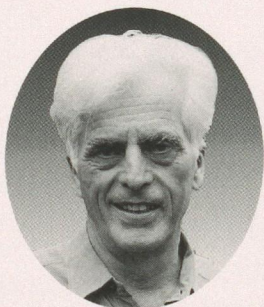
Paolo Maria Fasella
(Professor, Commission of the European Communities)
Professor Fasella has achieved an outstanding research work in the field of life science and its applied areas and, also, done the extensive international activities which contributed greatly towards harmonious development between man and science in this modern world.



1989

ロトフィ・A・ザデー (アメリカ)
カリフォルニア大学バークレー校教授
ファジー理論の提唱者として、その理論の発展のため国際的な諸活動を展開され、今後の情報化社会をより人間性のあるものへと導くために貢献。

Lotfi Asker Zadeh
(Professor, University of California, Berkeley)
As an advocate of Fuzzy Theory, Prof. Zadeh has been participating in activities around the world for the development of this theory, thereby contributing to leading the information oriented society of the future towards a more human direction.



1990

フライ・オットー (ドイツ)
シュツツガルト大学教授
膜構造建築と呼ばれる軽量建築の概念を確立し、この新しい手法を用いて、美しく豊かな人間環境の概念に即した数々の優れた建築作品を残した。

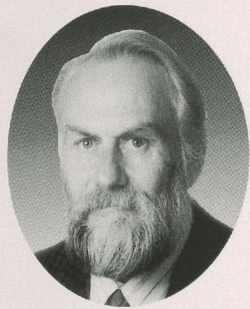
Frei Otto
(Professor, University of Stuttgart)
Prof. Otto, who established the concept of lightweight architecture referred to as a membrane structure, has presented many outstanding works of architecture utilizing such new methods and which reflect his concept of a beautiful and rich human environment.



1991

モンコンブ・S・スワミナタン (インド)
国際マングローブ生態系協会会長
インド亜大陸を食糧危機から救った「緑の革命」の実際上のリーダーとして、自然環境保護の分野でも国際的に精力的な活動を展開。

Monkombu S. Swaminathan
(President, International Society for Mangrove Ecosystems)
As an actual leader of green revolution which has saved the Indian subcontinent and its residents from a food crisis, he has worked actively and internationally in the field of environmental protection.



1992

ヘルマン・ハーケン (ドイツ)
シュツツガルト大学教授
シナジェティクスの創始者として、複雑なシステムの秩序形成の仕組みを理論的に解明し、これを幅広い分野に適用することにより、多くの学問領域に多大な影響を与えた。

Hermann Haken
(Professor, University of Stuttgart)
As an initiator of "Synergetics", he has theoretically clarified the complicated mechanism of the order formation of systems and applied its results to comprehensive scientific fields, extending great benefits over many other research fields.



1993

堀越弘毅 (日本)
東洋大学教授
好アルカリ性微生物の発見を始め、特殊環境微生物の分離、生育、工業的利用等一連の技術を発展し、新しい学問分野、極限微生物学を開いた。現在地球上の生物種の多様性とその保存のために世界的に活動している。

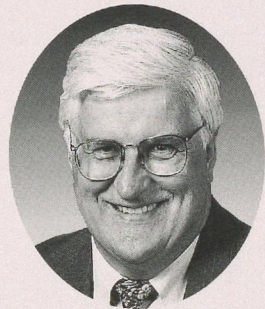
Koki Horikoshi
(Professor, Toyo University)
Professor Horikoshi discovered alkaliphilic microorganisms and established a new microbiology of alkaliphiles. His achievements in the area have opened the way for utilization of the microbes as new genetic resources as well as industrial application of the enzymes of "Superbugs" including alkaliphiles.



1994

ブノワ・マンデルブロー (フランス)
エール大学教授
フラクタル理論の創始者として、形を科学の対象とし、伝統的な数理的方法である微分をこえた新しい見方を提供。その概念は、自然科学のみならず、社会科学、芸術にも大きな役割を果たしつつある。

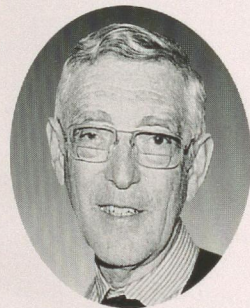
Benoit B. Mandelbrot
(Professor, Yale University)
As the developer of the fractal theory in bringing geometric shapes to the level of sciences, he provides us with an idea that goes beyond the traditional differential analysis, giving tangible impacts not only on natural sciences but on such matters as social sciences and art.



1995

オーケ・アンダーソン (スウェーデン)
スウェーデン未来学研究所所長
森林資源などの自然環境の保全と地域経済の発展の両立を図る理論展開および実践に多大の成果を上げる。又、創造性豊かな次世代の産業社会、C-社会を提案。

Åke E. Andersson
(Managing Director, Swedish Institute for Futures Studies)
Prof. Andersson has achieved the theory and practice of promoting the coexistence of environmental protection and the economic development of communities. In addition, he has played an important part in educating future generations by developing the concept of the new knowledge society or C-society.



1996

ブルース・N・エイムス (アメリカ)
カリフォルニア大学バークレー校教授
微生物の栄養要求性の逆変異の検出を利用した発ガン性物質の短期物質検索法、エイムス法を開発。更にこれを基本に環境中に存在する科学物質の発ガン性の短期評価法を確立した。世界中で採用され人類の健康に貢献。

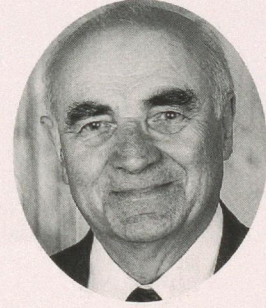
Bruce N. Ames
(Professor, University of California Berkeley)
Professor Ames is the developer of the Ames' Test designed to detect carcinogens in a short period of time by sensing the reverse mutation of auxotrophic microbes. Based on this test, he further established an advanced method for quickly evaluating the carcinogenicity of chemical substances that exist in our environment.



1997

ギュンター・E・ペツォー (ドイツ)
マックス・プランク金属研究所名誉所長
シュツツガルト大学名誉教授
多元系状態図、粉体冶金学の研究により、ファインセラミクスの実用化に多大な尽力。高温用タービン、人工関節、セラミクスエンジン等を可能にした。若手研究者育成にも大きく貢献。

Günter E. Petzow
(Director emeritus, the Max-Planck-Institute for Metals Research/Hon. Professor, University of Stuttgart)
Professor Petzow contributed greatly to the practical application of fine ceramics through his study of multi-components phase diagrams and powder metallurgy. He also contributed greatly to the education of young researchers.



1998

ユベール・キュリアン (フランス)
ピエール・マリー・キュリー・パリ第6大学教授
衛星を使った地球観測システムの発展に寄与。多くの国際的組織での科学研究政策の方向性決定に指導的な役割を果たしてきた。

Hubert Curien
(Professor of University Pierre et Marie Curie, Paris 6)
Professor Curien contributed to the development of the earth observation system by means of satellites. He played leading roles in determining the orientation of scientific research policy in diverse international organizations.

Honda Foundation

本田財団名簿

●理事長

川島廣守
(日本プロフェッショナル野球組織コミッショナー)

●常務理事

宮原弘光

●理事

渥美和彦
(鈴鹿医療科学技術大学学長)

大河原良雄
(勸世界平和研究所理事長)

大久保博司
(本田技研工業(株)取締役)

白根禮吉
(多摩大学名誉教授)

古川俊之
(国立大阪病院名誉院長)

山室英男
(日本放送出版協会顧問)

吉村 融
(政策研究大学院大学学長)

●監事

伊藤 醇
(中央監査法人代表社員)

鈴木康之
(本田技研工業(株)監査役)

●顧問

都倉栄二
(勸国際交流サービス協会特別参与)

西田通弘
(本田技研工業(株)顧問)

●評議員

浅利慶太
(劇団四季代表)

石井威望
(東京大学名誉教授)

内田裕久
(東海大学工学部教授)

茅 陽一
(慶應義塾大学大学院政策・メディア
研究科教授)

●評議員

軽部政夫
(東京大学先端科学技術研究センター教授)

川崎雅弘
(勸日本科学技術振興財団常務理事)

菊竹清訓
(建築家)

木村尚三郎
(東京大学名誉教授)

清成忠男
(法政大学総長)

黒田玲子
(東京大学教養学部教授)

小島章伸
(株QUICK相談役)

小島 明
(日本経済新聞社論説主幹)

児玉文雄
(東京大学工学系研究科教授)

清水 博
(金沢工業大学情報工学科教授)

鈴木増雄
(東京理科大学理学部教授)

寺野寿郎
(東京工業大学名誉教授)

中嶋嶺雄
(東京外国語大学学長)

西垣 通
(東京大学社会科学研究所教授)

西野文雄
(政策研究大学院大学教授)

野中郁次郎
(北陸先端科学技術大学院大学教授)

藤正 巖
(政策研究大学院大学教授)

村上陽一郎
(国際基督教大学教養学部教授)

●名誉会員

ジャン・クロード・シモン
(ピエール&マリー・キュリー大学)

エドワード・H・ジュニングス
(オハイオ州立大学総長)

コールドコート子爵
(フェローシップ・オブ・エンジニアリング会長)

デーヴィッド・サイドラー
(オーストラリア・アカデミー・オブ・テクノ
ジカル・サイエンス・アンド・エン
지니어リング理事長)

ジャック・ソルヴェイ
(ソルヴェイ国際物理・化学研究所理事長)

●President

Hiomori Kawashima
(Commissioner, Nippon
Professional Baseball)

●Managing Director

Hiromitsu Miyahara

●Directors

Kazuhiko Atsumi
(President, Suzuka University of
Medical Science & Technology)

Yoshio Okawara
(President, Institute for
International Policy Studies)

Hiroshi Okubo
(Director, Honda Motor Co.,Ltd.)

Reikichi Shirane
(Professor Emeritus, Tama University)

Toshiyuki Furukawa
(Honorary President, Osaka
National Hospital)

Hideo Yamamuro
(Advisor, Japan Broadcast
Publishing Co.,Ltd.)

Toru Yoshimura
(President, National Graduate
Institute for Policy Studies)

●Auditors

Jun Itoh
(Managing Partner, Chuo Audit
Corporation)

Yasuyuki Suzuki
(Statutory Auditor, Honda Motor
Co.,Ltd.)

●Advisors

Eiji Tokura
(Senior Counsellor, International
Hospitality and Conference
Service Association)

Michihiro Nishida
(Advisor, Honda Motor Co.,Ltd.)

●Councillors

Keita Asari
(President, Shiki Theatrical Company)

Takemochi Ishii
(Professor Emeritus, University of Tokyo)

Hirohisa Uchida
(Professor, Faculty of Technology,
Tokai University)

Yoichi Kaya
(Professor, Keio University (SFC))

Isao Karube
(Professor, Research Center for
Advanced Science and Technology,
University of Tokyo)

Masahiro Kawasaki
(Managing Director, Japan
Science Foundation)

Kiyonori Kikutake
(Architect)

Shosaburo Kimura
(Professor Emeritus, University of Tokyo)

Tadao Kiyonari
(President, Hosei University)

Reiko Kuroda
(Professor, College of Arts and
Science, University of Tokyo)

Akinobu Kojima
(Senior Corporate Advisor,
QUICK Corp.)

Akira Kojima
(Chief Editorial Writer, Nihon
Keizai Shimbun, Inc.)

Fumio Kodama
(Professor, Technology & Policy,
Graduated School of Engineering,
University of Tokyo)

Hiroshi Shimizu
(Professor, Faculty of Information
Technology, Kanazawa Institute of
Technology)

Masuo Suzuki
(Professor, Faculty of Science,
Science University of Tokyo)

Toshiro Terano
(Professor, Emeritus, Tokyo Institute
of Technology)

Mineo Nakajima
(President, Tokyo University of
Foreign Studies)

Toru Nishigaki
(Professor, Institute of Social
Science, University of Tokyo)

Fumio Nishino
(Professor, National Graduate
Institute for Policy Studies)

Ikujiro Nonaka
(Professor, Japan Advanced Institute
of Science and Technology)

Iwao Fujimasa
(Professor, National Graduate
Institute for Policy Studies)

Yoichiro Murakami
(Professor, College of Liberal Arts,
International Christian University)

●Honorary Fellows

Jean Claude Shimon
(Professor, Pierre et Marie Curie
University)

Edward H.Jennings
(President, Ohio State University)

Viscount Caldecote
(President, The Fellowship of
Engineering)

David Zeidler
(President, Australian Academy of
Technological Sciences and
Engineering)

Jacques Solvay
(President, The International (Solvay)
Institutes of Physics and Chemistry)



財団
法人 **本田財団**

東京都中央区八重洲2-6-20(ホンダ八重洲ビル)
〒104-0028 電話03-3274-5125, ファクシミリ03-3274-5103

HONDA FOUNDATION

6-20, Yaesu 2-chome, Chuo-ku, Tokyo 104-0028, Japan
Tel. 03-3274-5125, Telefax. 03-3274-5103
